

「司馬光傳承」拾遺

——明清「編年」書六種における——

熊 本 崇

序にかえて

別稿^{〔1〕}では、宋哲宗朝初における司馬光最晩年の事蹟、首相發令と就任、差役法復活——募役法から差役法への回歸——等を、『資治通鑑』の後繼を稱する明清人の「編年」書六種が、如何に傳えたかを明らかにすべく試み、いくつかの知見を得た。例えば先行する史書の後發のそれに對する、拘束力の強さである。後者が前者の踏襲に過ぎぬ場合が、むしろ常態でさえある。あるいは後發史書の怠慢もこれを然らしめる、要因であろう。また六書のうち明薛應旂のそれはその「義例」で、嚴密な「編年例」を遵守したと誇る。「予於紀事、仍序書於年月日之下云云」がそれであるが實際には、自身が批判した「紀傳體」——「或合始末併書之」——に堕した具體例も、散見する。

明人の四書には、差役法の復活は光の正月二十二日上奏（「罷免役錢依舊差役筭子」）が「得旨」した、元祐元年（一〇八六）二月六日であるにも拘わらず、閏二月あるいは三月とする、二月末に設置された詳定役法所の意味、光正月「筭子」との關係についての理解不足等の、問題点を指摘し得た。詳定役法所等役法關連記事が、特に清徐乾學等の書において如何に繼承されたか、その検討が小稿に遺された課題である。乾學等に敢て限定するのは、乾學等の不備はほぼただちに畢沅のそれでもあるからである。少

なくとも當該期の光をめぐる記事に限れば、畢沅は殆ど乾學等の轉寫に終始する。因みに六者のうち畢沅の書だけが『四庫全書』以後の、編纂に係る。『永樂大典』から抽出された李燾の『續資治通鑑長編——以下長編——』、特にその哲宗紀を利用し得たのは畢沅のみである。その史料環境において畢沅は、他の五者より著しく有利であつた。

小稿では別稿同様六種の「編年」書を、以下の如く略稱する。①明陳桎『通鑑續編』、陳桎A、②同商輅『通鑑綱目續編』、商輅B、③同薛應旂『宋元資治通鑑』、應旂C、④同王宗沐『宋元資治通鑑』、宗沐D、⑤清徐乾學等『資治通鑑後編』、乾學等E、⑥同畢沅『續資治通鑑』、畢沅F。

I、門下侍郎就任

徐乾學等Eには、先行する明人——陳桎・商輅・薛應旂・王宗沐——の四書に比べその「編年」に、若干の改善がみえる。司馬光の元祐元年（一〇八六）正月二十二日上奏に係る、「乞罷免役錢依舊差役劄子」を——明人の如く同年閏二月ないしは三月ではなく——聖旨「奏ニ依レ」を得た、二月六日に繋げたからである。「奏ニ依レ」は、光の該「劄子」を以て差役法が、復活したことを意味する。ただ遺憾な點が無いわけではない。同じく光の「乞去新法之病民傷國者疏」を、E卷八六元豐八年（一〇八五）五月戊午（二十五日）條に引くのは、その一例である。E同條は、光への門下侍郎（執政官）發令、光の辭退と最終的受諾を傳えている。受諾は實際には二十八日のことと考えられる。別稿にもみたように、該「疏」上奏時光の寄祿階は、太中大夫であり、門下侍郎發令時のそれは一級上の、通議大夫であるから、明らかに「疏」は發令以前、恐らくは四月二十七日の上奏に係る。「疏」の一節には「如保甲・免役錢・將官三事、皆當今之急務、釐革所宜先者、臣今別具狀奏聞」とみえ、總論というべき「疏」とは別に、各論「乞罷保甲狀」「乞罷免役狀」「乞罷將官狀」の三「狀」が、同時に上奏された。「疏」と三「狀」は、執政官登用を豫測した光における施政方針の、一環と位置づけ得よう（『溫國文正司馬公集——以下司馬公集——』卷四九「乞罷免役錢依舊差役劄子」、同卷四六「乞去新法之病民傷國者疏」、同「乞罷保甲狀」、同卷四七「乞罷免役狀」、同「乞罷將官狀」）。

『宋史』卷一七七役法上は——あるいは陳均『皇朝編年綱目備考』——以下備考——』卷二十一元豐八年五月「司馬光門下侍郎」條「分註」を誤讀して——三「狀」の一「乞罷免役狀」を、門下侍郎光の上奏として引き、陳桎Aも役法上に據り、A卷一〇元祐元年閏二月「詔詳定役法」條「分註」に、「執政」光の上奏として「乞罷免役狀」を、節略する。乾學等E五月戊午條における「疏」は、これと範疇を同じくする、少なくとも「編年書」としての不備ではある。

乾學等Eは、楊仲良『資治通鑑長編紀事本末』——以下紀事本末』卷九四「變新法」に據って、「疏」上奏が元豐八年四月己丑（二十六日）——『長編』は庚寅（二十七日）——であることを知り得る立場に在りはした。だがE五月戊午條は、『宋史』卷三三六光傳と明人の四書A B C D、および蘇軾撰の光「行狀」を、繼承したであろう。光傳は「起光知陳州、過闕、留爲門下侍郎」としたあと、「是時天下之民」は新政（新法改變）に期待したが、議者（新法黨）が「三年無改於父（神宗）之道」を口實に、人言を防遏しようとしたため、光が「況太皇太后以母改子、非子改父」と反論し、衆議は鎮定したと述べる。陳桎A卷九元豐八年五月「以司馬光爲門下侍郎」條「分註」、商輅B同年同月同條「分註」、應旂C卷三九同年同月「丙辰」條、宗沐D同年同月戊午條⁵はなべて、光傳の記述を踏襲する。「況太皇太后云云」は、母である高氏は神宗の諸政策を否定してよいとする、新法改變正當化における最有力の論據である。該「疏」末尾には、「況今軍國之事、太皇太后陛下權同行處分、是乃母改子之政、非子改父之道也、何憚而不爲哉」とある。「編年」書としての妥當性を害うとはいえ、乾學等には、「疏」を戊午條に繋げる必然性は有った。ただ「三年無改於父之道」に對する光の反論については、乾學等は、「疏」自體よりむしろ、軾撰「行狀」におけるその節略を採った（『名臣碑傳琬琰集』中卷五一「司馬文正公行狀」）。

『宋史』光傳には、「況太皇太后以母改子、非子改父」に先行して、「光曰、先帝之法、其善者雖百世不可變也、若安石、惠卿所建、爲天下害者、改之當如救焚拯溺」とあるがこの一節は、軾撰光「行狀」に據る。「行狀」には「公慨然爭曰、先帝之法、（中略）、當如救焚拯溺、猶恐不及」とあるからである。「行狀」の「猶恐不及」以下には、「昔漢文帝除肉刑、（中略）、景帝元年即改之、（中略）、德宗晚年爲宮市、（中略）、順宗即位罷之、當時悅服、後世稱頌、未有或非之者也。況太皇太后以母改子、非子改父」とある。特に「昔漢文帝」以下は明らかに、光「疏」後段の節略である（ただし「先帝之法」以下「猶恐不及」までを軾が何に採ったかは

詳らかにし得ない)。乾學等E五月戊午條は、「行狀」の「公慨然爭之曰」以下「非子改父」に至るまでを、ほぼ字字句句採録する。E戊午條は光傳の當該部分を、「行狀」を以て増量した。

門下侍郎發令以前の上奏を、發令以後に引用する筆法は、「行狀」・列傳等「紀傳體」の場合には當を失しているとはいえない。「編年」書であるにしても、例えば陳樞A・商輅Bのように「綱目」の體を採り、某月某日某條「分註」に、複數年に渉る記事を集中して收録する場合も、一概に不當とは爲し得まい。應旂C・宗沐Dはすでに「綱目」ではなく、「編年」書である。だが兩者の基本的作業は、商輅B「分註」の正文化に過ぎずしかも、某日條における——あるいは複數年に渉る——諸記事の、前後關係、因果關係は必ずしも整序されていない。例えばB「以司馬光爲門下侍郎」「分註」「既而蘇軾自登州召還、緣道人相聚號呼曰、寄謝司馬相公、母去朝廷云云」は、そのままC「丙辰」D戊午條に繋けられる。軾は五月戊戌(六日)配流(常州安置)を赦され、朝奉郎を以て知登州を發令された。⁽⁶⁾登州から開封への召遷はこの年十一月以降である。四月上奏に係る光「疏」は、この「既而蘇軾云云」に接續されている。應旂C宗沐Dの「編年」は、不適切の毀りを免かれまい。例えば、「先是」等前後關係の明示も無いまま、乾學等Eも光「疏」を五月戊午條に繋けている。CDの踏襲であるがさらに、乾學等は同一疏の前段を恰かも別の一疏の如くに、引用する。乾學等E五月戊午條の構成はほぼ以下の如くである。①門下侍郎發令。②發令以前、知陳州を以て過闕、入見。「詔書始末之言、固已盡善、中間逆以六事防之云云」を上奏。③「至是拜門下侍郎、光辭、二劄並臣。其一請釐革新法曰云云」④「光復辭。太皇太后賜以手詔、〈中略〉、且使梁惟簡宣旨曰、早來所奏備悉卿意、再降詔開言路、俟卿供職施行。光由是不敢辭」⑤「時民日夜引領以觀新政、而議者猶以爲、三年無改於父之道」⑥「光慨然爭之曰、〈中略〉、昔漢文帝云云」

②過闕までと、①⑤⑥は『宋史』光傳と「行狀」に據つたであろう。③「請釐革新法」として乾學等が引用したのが、「如保甲・免役錢・將官三事、皆當今之急務釐革所宜先者、臣今別具狀奏聞」に至るまでの、四月上奏に係る光「疏」前段にはかならない。該「疏」は④⑤を介して、⑥「光慨然爭之曰、〈中略〉。昔漢文帝云云」の後段と、分離された。かかる不自然な引用には、「行狀」の影響を想定し得る。「行狀」は、「詔除公知陳州、且過闕入見、〈中略〉、至則拜門下侍郎、公力辭、〈中略〉、公不敢復辭」に先行して、『司馬公集』卷四六「乞開言路劄子」同卷四七「乞開言路狀」「乞改求諫詔書劄子」⁽⁸⁾の節略を引き、次いで「a公方草具所當

行者、而太皇太后已有旨、散遣修城役夫、寬保馬限。皆從中出、大臣不與。b 公上疏謝、當今急務、陛下略已行之矣、小臣稽慢、罪當萬死〔a b、傍點引用者〕という。「皆從中出、大臣不與」の前後 a b はいずれも、該「疏」前段の引用である。「疏」には a' 「既而聞有旨罷修城役夫、〔中略〕。及歸西京之後、繼聞〔中略〕、又寬保馬年限」b' 「凡臣所欲言者、陛下略已行之、臣稽慢之罪、實負萬死」とあるからである。「公不敢復辭」以後に「疏」後段、「公慨然爭之曰、〔中略〕。昔漢文帝云云」を「行狀」は引く。「行狀」の該「疏」引用は三分されている。

五月戊午條③に「疏」前段を引用する、乾學等 E の錯誤を決定づけたのは、揚仲良『資治通鑑長編紀事本末』以下「紀事本末」であろう。同書卷九三「求直言」五月戊午條は、「資政殿學士通議大夫司馬光爲門下侍郎。初光以知陳州過闕、未入對、上疏曰」として、光の「乞改求諫詔書劄子」を引く。E 戊午條②は、その節略であり、戊午條における、直接「行狀」に採った部分、「行狀」に起源し『宋史』光傳を経て明人四書（A B C D）に繼承された部分と、『紀事本末』に由來するそれとの混在が、判明する。『紀事本末』に據ればこそ乾學等は、「乞改求諫詔書劄子」を光の知陳州、過闕以前に置く、「行狀」の不適切を是正し得たのであろう。E 戊午條④は『司馬公集』とともに『紀事本末』も參照したのであろう。同書卷九四「變新法」同年同月同日條に、「資政殿學士通議大夫司馬光爲門下侍郎、a 光以劄子辭免、乞對訖赴陳州、b 并請更張新法曰、〔中略〕。c 于是太皇太后、遣中使梁惟簡賜手詔諭令供職曰、〔中略〕、卿又何辭。再降詔開言路、須卿供職施行。光乃受命〔a b c は引用者附加〕とみえる。「變新法」c は E 戊午條④にはば一致する。E 戊午條③も「變新法」b に據ったとみなして、誤り有るまい。乾學等は恐らく「變新法」b 「請更張新法」に據り、その戊午條④「請釐革新法」以下に、「疏」前段を引いた。乾學等の錯誤はここに存する。b 「請更張新法」には、「臣會上言、教閱保甲、公私勞費而無所用之、歛免役錢、寬富而困貧、以養浮浪之人、〔中略〕、將官、專制軍政、州縣無權、無以備倉卒云云」とみえる。過去——「曾」光「劄子」では「晁曾」——の上言とは、「疏」および「乞罷保甲狀」以下三「狀」以外ではあるまい。いうまでもなく「疏」と「請更張新法」は同一ではあり得ない。乾學等は兩者を混同した。

『司馬公集』卷四七には、「請更張新法劄子」「乞改求諫詔書劄子」「辭門下侍郎第一劄子」「第二劄子」が有る。『紀事本末』「變新法」a における「劄子」は、「伏望聖慈特寢新命、聽臣赴陳州本任云云」という、「第一劄子」であろう。該「劄子」からすれば

光は、五月二十七日段階で就任を受諾してはいない。「第二劄子」自注には、「又未上聞、中使梁惟簡賜手詔令受、傳宣『再降詔開言路、俟卿供職施行』遂止不上^⑨」とある。高氏が、宦者に口頭で伝えさせた「宣」において、光の主張「開言路」を光就任後施行すると確約したため、該「劄子」は「不上」におわった。^⑩「不上」とは就任受諾と同義であろう。「第二劄子」には、「言路不通新法患爲るは當今の切務なるを以て、遂くて今早に於て一劄子を入れ恩命を辭免し、準備する所の上殿劄子二道を并せ通進司に於て投下するに及びては、未だ聖意臣が前後所言を以て果たして如何と爲すやを審らかにせず云云（傍點引用者）」とみえる。「一劄子」は「辭門下侍郎第一劄子」、上殿奏事のために準備されていた「劄子二道」のうち一道は、「乞改求諫詔書劄子」を謂うであろう。『司馬公集』同卷所收の高氏手詔——および傳宣——に、「早來所奏、備悉卿意、再降詔開言路云云」とみえる。「一劄子」「劄子二道」上奏と同日中に、「開言路」を確約する高氏の回答が、有った如くである。「第二劄子」冒頭には、二十八日御藥（宦官）吳靖方が派遣され、門下侍郎告身の受理を光に促したという。これの辭退を表明した「第一劄子」は「劄子二道」とともに、即日上奏されたのである。二十八日は雙日であり、高氏が延和殿に垂簾し臣僚が、上殿奏事する日でもある。「乞改求諫詔書劄子」が「言路不通」を論じたとすれば、「新法爲患」を論じたそれは「請更張新法劄子」にほかなるまい。五月二十八日上奏に係る「請更張新法劄子」は、四月に上奏された「疏」と、決して同一ではあり得ない。

「請更張新法劄子」と「疏」とは、その内容が共通する。兩者とともに、保甲・免役錢・將官の廢止を當今の急務とする。「請更張新法劄子」も「疏」と同じく、その末尾に「況太皇太后陛下、同斷國事、捨非而取是、去害而就利、於體甚順、何爲而不可」といい、「母」高氏による新法の廢止を——用字は相異するが——正當化している。後發の「劄子」が先行する「疏」の、光自身の要約であるからにほかなるまい。乾學等E戊午條③に「二劄並進」というから、乾學等は、「上殿劄子二道」という『司馬公集』「第二劄子」を参照していた。だが同じ『司馬公集』に據つて、「請更張新法劄子」と「疏」との異同を確認する、最も基本的作業を怠った。

乾學等E戊午條に「編年」書として不適切な、⑤⑥——「疏」後段——が遺されたのは、これが正史光傳に由來し明人四書も、光の門下侍郎發令と一括して⑤⑥に相當する記事を、五月に繋げた故であろう。特に⑥において乾學等は、光傳からさらに「行狀」

に遡及している。翌年閏二月庚寅の光の首相發令の場合にも、乾學等は「行狀」に據っている。「母」高氏による新法改廢の正當化を、門下侍郎發令と不可分でありかつ、首相發令と同様に重要とみなした故に、光傳より以上の詳細を期したのであらう。いずれにせよ⑤⑥には『宋史』および明人四書の、乾學等に對する拘束力を想定し得る。E戊午條②③④は、『紀事本末』「求直言」と「變新法」を繼承しようとした。『宋史』光傳および明人四書と、『紀事本末』との折衷が試みられたが、③「請釐革新法曰」以下に、「疏」前段を引く錯誤を犯し、破綻を露呈するに至った。錯誤を然らしめたのは、乾學等における『司馬公集』檢詳の不備ではあるが、「行狀」にあるいはその副次的原因とみなすこともできる。「行狀」が⑥「公慨然爭之曰」以下以外にも、光の知陳州發令以前に、恰かも別個の上奏の如く「疏」の一部——後段——を引くからである。E戊午條③における錯誤は一面では、かかる「行狀」の「疏」引用が、誘發したといえる。ただし「紀傳體」史料——「行狀」——の「編年」書における再構成が、疎そかであるとは、指摘せざるを得まい。

乾學等の疎略は覆い難いが、畢沅はより以上の責を負うべきであらう。F卷七八元豐八年五月戊午條は例の如く、乾學等E當該條の轉寫に過ぎない。『長編』同月同日條は光の門下侍郎發令に續けて、「乞改求諫詔書劄子」「請更張新法劄子」全文を引く。畢沅がこれに據れば、乾學等の誤謬は是正され得た（『長編』卷三五六／一一～一二）。

II、『紀事本末』「差役」

別稿では陳樞A卷一〇元祐元年閏二月「詔詳定役法」條「分註」、同月「章惇免」條「分註」、三月「罷免役錢復差役法」條「分註」における、光およびその差役法復活に關わる記事を①～⑭に分け、後續する明人三書（BCD）にそれらが、如何に繼承されたかを検討した。①～⑦は、陳樞が光の正月二十二日「乞罷免役錢依舊差役劄子」の、引用以前に配した記事、⑧～⑭は該「劄子」引用以後に配したそれである。乾學等EにおけるA①～⑦の繼承は、ほぼ認め得ない。②は「疏」の各論というべき三「狀」のひとつ、「乞罷免役狀」であるが、乾學等は總論である「疏」を——誤って——元豐八年五月戊午に繋げ、繼承に代えたともいえる。

光正月「筭子」に續く⑧は、光の「乞堅守罷役錢敕不改更筭子」である。『宋史』卷一七七役法上は兩筭子を混同し、後者の末尾を前者の引用に直結させ、陳樞はこれを踏襲した。役法上と陳樞の錯誤はすでに、商輅Bが修正している。A⑧「筭子」を乾學等は抄録する。ただし元年二月甲戌（十五日）條においてである。『紀事本末』卷一〇八「差役」はこれを同月丙子（十七日）條に繋げる。畢沅FもEをほぼ踏襲するが、ただこの場合は所引「筭子」冒頭に「丙子」を、補っている。乾學等は本来有るべき「丙子」二字を脱落させたのである。乾學等Eにおける日付（干支）の脱落は、以下にみるように頻出する。陳樞A⑨以降と對應する乾學等Eの記事の、月日を示せば次の如くである。〈 〉内は『紀事本末』「差役」、または同卷九七「逐小人上」に、對應記事がある場合の月日である。

⑨章惇駁奏、①E卷八七二月甲戌、〈「差役」同月丁亥（二十八日）〉⑩詳定役法所設置、②同二日甲戌、〈「差役」同月丁亥〉⑪蘇軾の光批判③同二月辛巳（二十二日）、〈×〉⑫知開封府蔡京の光への報告、④同二月辛未（十二日）、〈「差役」同月丁亥〉⑬章惇罷免、④同閏二月辛亥（二十三日）、〈「逐小人上」同月同日〉⑭（i）役人見額維持、衙前以外は定差、罷官戸等助役錢、⑤同三月庚辰（三日）、〈「差役」同月己未（二日）〉⑮（ii）范純仁の光批判、⑥同二月辛巳、〈「差役」同月丁亥〉

乾學等E⑥には、陳樞A以下明人の四書と、『紀事本末』「差役」の「三月己未、詳定役法所言、乞下諸路a除衙前外諸色役人、只依見用人數定差b今年夏料納〔役？〕錢住罷、更不起催c官戸・僧道・單丁・女戸出錢助役指揮勿行。從之（「a b cは引用者）」と兩者の、影響を見出し得る。まずa cはE三月庚申條と字字句句一致する。『宋史』役法上に據る陳樞A以下明人のa相當部分は、坊場河渡錢を用いた衙前の雇募、不足の場合の定差にも言及し、これより詳細である。陳樞は役法上における「逐罷官戸（中略）女戸出助役法」の、「出助役法」を脱落させ、商輅以下三者もこれを踏襲した。役法上自體「錢」字を脱落させているから、乾學等は「差役」に據ってこれを補正した。一方A以下明人四書は役法上の「其今夏役錢即免輸」、「差役」b相當部分を一貫して脱落させている。「今夏役錢」は兩税法における夏税とともに徴収するべき役錢であらう。光正月「筭子」が二月六日「得旨」し、免役錢廢止が決定した。これを実施すべくまず爾後の夏期役錢の廢止が、建議されたのであらう。乾學等E⑥にも明人四書同様、「差役」b相當部分が無い。別稿には、A三月に、「罷免役錢復差役法」を立てる以上、陳樞は、なんらかの貨幣徴収廢止を以て差役

法復活の證據とみなした、「出助役法」を脱落はさせたが、助役錢の廢止を免役錢のそれとみなしたという、想定を示した。E①は「差役」c相當部分に續き、『紀事本末』には無い記事を附加する。「王安石聞朝廷變其法、夷然不以爲意、及聞罷助役復差役、愕然失聲曰、亦罷至此云云〔傍點引用者〕」が、それである。出處は『三朝名臣言行錄』卷六丞相荆國王文公の一條であろう。『扈史』に據るといふ當該條は、殆ど①と一致するがただ、①傍點部分に對應するのは、「及聞罷役法」である。既に「差役」b「夏納役錢」を採らないばかりか、『扈史』の「役法」を「助役」に改めているのは、安石役法（免役錢）の廢止と助役錢のそれとを同義とする理解——誤解——延いては三月に始めて、差役法が復活したとする誤解を、陳樞と共有した故ではないか。乾學等Eは明人四書と異なり、光正月「筭子」とその「得旨」を、「差役」と同じく二月六日に繋けるが、「得旨」の意味——差役法復活——が正しく理解されたのか、疑問を遺す。明人四書における『宋史』役法上「出〔錢〕助役法」四字の脱落を、『紀事本末』「差役」cを以て補正した點は評價し得ても、宋代役法に對する理解不足については、Eは明人を繼承している。畢沅Fも『長編』三月庚辰條を以て、Eにおける「差役」b缺落を知り得たにも拘わらず、例の如くEを踏襲している。

乾學等E二月の諸記事（a）（b）（c）（d）と、これに對應する『紀事本末』「差役」のそれとの日付には、不一致が明らかである。また後者のそれはすべて丁亥でもある。「差役」丁亥條の内容は概略以下の如くである。①（i）惇の光役法（正月二十二日「乞罷免役錢依舊差役筭子」、二月十七日「乞堅守罷役錢敕不改筭子」）駁奏。（ii）「惇又嘗與同列爭曰、保甲保馬一日不罷則有一日害、如役法、熙寧初以雇代差、行之太速、故有今弊、今復以差代雇、當詳議熟講、庶幾可行、而限止五日、其弊將益甚矣」。②御史中丞劉摯上奏二件、節略。③左〔右？〕司諫蘇轍上奏二件、節略。④知開封府蔡京、「東府」で光に報告、⑤呂公著の詳定役法建議と詳定役法所設置の詔。⑥光上奏（『司馬公集』卷五一「乞申敕州縣依前敕差役筭子」）節略。⑦范純仁の光批判。⑧中書舍人范百祿の、光への助言。「差役」丁亥條は、右正言王觀上奏を缺く點、惇以下の上奏が節略である點を除き當然ながら、『長編』同日條と一致する。「差役」丁亥には李燾の役法記事における編纂方針を、窺い得る。李燾は、詳定役法所設置詔を閏二月二日とする（『新哲宗實錄』、二月二十九日とする（『舊哲宗實錄』のいづれをも排し、『司馬公集』卷五一「三〔二〕月二十八日內降」を根據に二十八日を是とする考證を、展開する。あるいは閏二月二日とする『新錄』を、「似太疎略也」とささいう。かかる執著からすれ

ば『長編』丁亥條における李燾の中心課題は、詳定役法所の設置、延いてはこれが必要とした光役法（正月「筭子」）における、不備にはかなるまい。光役法に不備有ればこそ章惇はこれを駁奏し、駁奏されたからこそ公著は、不備を彌縫し微修正すべく詳定役法を、建議した。詳定所設置に至る経緯がここに表わされている。従つて惇駁奏も——『長編』および「差役」が冒頭に「先是」とするように——必ずしも丁亥の上奏ではない。詳定所設置の必然性を明らかにするうえで、丁亥條に諸多の記事を集中する必要が、李燾には有った（『長編』卷三六七／三二二〇）⁽¹²⁾。

『紀事本末』「差役」二月丁亥條と内容的には對應しながら、日付が一致しない乾學等Eの記事のうち、E④蔡京關係記事については、「差役」の如く丁亥ではなく辛未（十二日）に繋げた必然性を、想定し得る。光正月二十二日「筭子」は、翌月六日に「得旨」し同七日に行下された。「筭子」には「即仰限敕到五日内」の句が有る。所謂「五日」が差役法に關わる期限であるならば、十二日が期限満了の翌日である。京は開封・祥符兩縣役法の差役への回歸を「五日の限を用い」完了したと、光に報告しその賞賛を得たという。「五日」が、この逸話を十二日に繋げた理由であろう。他の不一致を然らしめたものとして、まず考えられるのは干支の脱落である。みたように乾學等は、光の「乞堅守罷役錢敕不更改筭子」抄録に際し、本來有るべき冒頭の干支を脱落させ畢沅が、「丙子」を補っている。既に「丙子」の脱落が有る以上「丁亥」のそれも、有り得る。本來乾學等Eは必ずしも決定稿ではなかった。『四庫全書叢目提要』卷一〇史部・編年「資治通鑑後編」にいう。「今原藁僅ど存し惟だ第十一卷を闕く、書中塗乙刪改の處多く、猶お「閏」若璩の手續のごとしと相傳せらる」抹消（塗）前後入替（乙）書替（刪改）が、隨處に遺されていたのであれば、干支脱落も生じ易い。

乾學等E二月甲戌（丙子）條以後には、「差役」丁亥條①～⑧のうち、②③⑥⑧に相當する記事は無い。⑧をEは正月丙辰條にすでに採録している。「差役」丁亥條①はE④、④はE④、⑤はE⑥、⑦はE⑧にそれぞれ對應する。E③軾の光批判に對應する記事は、「差役」丁亥條には無い。Eが二月辛未に繋げた④、閏二月辛亥⑤、三月庚申⑥を除き、他の四項②③⑥⑧はE二月において、次のように配列される。

甲戌（丙子）光「筭子」抄録・④・⑤——庚辰（二十一日）——辛巳（二十二日）②・③・⑥・⑧

①②を二月甲戌、③④を同月辛巳としたのは、かかる配列の故である。E二月には丁亥（二十八日）條は無い。畢沅が補った「丙子」脱落に鑑み「丁亥」の脱落をも想定すれば、配列は次のように修正される。

「丙子」光劄子抄録——丁亥①・②——庚辰——辛巳——「丁亥」③・④

E庚辰以下には、「庚辰、夏國遣使來貢、辛巳、寶文閣待制・刑部侍郎蹇周輔、坐變湖南鹽法、抑勒騷擾、落職知和州。⑤蘇軾言於司馬光云云〔⑥は引用者〕とある。『宋史』哲宗本紀元年二月の末には、「庚辰、夏人入貢、辛巳、刑部侍郎蹇周輔、坐變鹽法落職」とみえる。少なくとも元年二月については、Eは本紀の記事をすべて採録している。これが編集における基本方針であったと、考えられる。例えばEは「三月辛未、詔母以堂差衝在選已注官云云」とする。以下E三月は殆ど本紀の轉寫に過ぎない。その結果辛未（十四日）以前の、己未（二日）・庚申（三日）——先出⑥を含む——、「庚午（脱落）」（十三日）の諸記事は、三月の記事でありながら恰かも、前月閏二月のそれであるかの如くに、誤解を誘う¹³。本紀を偏重せぬ限り有り得ぬ、疎略にほかならない。恐らくは乾學等はその草稿において、「丙子」「丁亥」を脱落させたまま、光「劄子」抄録に①②を續けた。その段階で本紀から採録すべき庚辰・辛巳兩條の遺漏を發見し、忽卒の間に、①②にこれを續け、さらに辛巳蹇周輔落職記事の後に、③④を追書した。經緯はこのように想定できる。二月辛巳に例えば⑤軾の光批判のような、役法關係記事を繋げるべき、然るべき根據は見出し得ない。『長編』二月辛巳條にも、役法關係記事は無い。想定 of 如くであれば、本来E二月における配列は以下の如くされる筈であった。

「丙子」光「劄子」抄録——庚辰、夏國遣使——辛巳、周輔落職——「丁亥」①②③④

記事の内容については暫く措き、その日付については『紀事本末』「差役」が、一定の影響を與えたであろう。畢沅は本來有るべき「三月」二字を己未（二日）の前に補い、乾學等の疎略を修正してはいる。だがE二月の諸記事については、光「劄子」の前に丙子を補ったほかは、日付における乾學等の混亂を放置し、踏襲している。

『紀事本末』「差役」二月丁亥條①②③と對應する記事が、E①②③に有り、しかも内容に相違が有る事例はとりあえず、次の二點である。まずE②後段「又嘗與同列爭曰云云」は、「差役」丁亥①（ii）と一致するが、①（i）章惇の長文の駁奏は、②前段では「章惇取光所奏凡疎略未盡者、枚數而駁奏之」と、極端に簡略化されている。「章惇取光所奏云云」は、E甲戌（丙子）條の

光「乞堅守罷役錢敕不改筭子」節略の、直後に配されるから、恰かも駁奏の標的——「光所奏」——はこれに限定され、光正月二十二日「筭子」は除外されるかの如くに、印象されもする。「差役」丁亥⑤に對應するE⑥には、公著の詳定建議は有るが、詳定役法所設置の詔は無く、詔は閏二月庚寅（二日）に繫けられる。差役法復活——詳定所設置を含む——關係記事を一括して元年三月に繫ける、商輅B・應旂C・宗沐Dを超え、閏二月に「詔詳定役法」條を立てる陳樞に、回歸した如くではあるが、乾學等にみた本紀偏重の姿勢から推して、本紀に従ったとみなすべきであろう。惇駁奏の簡略化は、明人四書以來一貫している。光役法の不備——「疎略未盡」——はかくて、稀釋され續ける。明人四書と乾學等Eの相異も摘出し得る。Eが敢えて二月辛未に繫けた④蔡京記事は、京の光への報告の場を、應旂C・宗沐Dまでの「政事堂」ではなく、「東府」としている。「東府」への修正は明らかに『紀事本末』が然らしめた。「差役」二月丁亥條は「知開封府蔡京、（中略）、亟詣東府白光云云」とし、さらに「此據邵伯溫『見聞錄』并紹聖三年十二月己未董敦逸章。伯溫謂蔡京詣政事堂、白司馬光、誤也。或至東府耳〔傍點引用者〕」という、李燾注を引くからである。ただし「東府」であることの意味を、乾學等が理解したとはみなし難い。

『紀事本末』「差役」二月丁亥條⑦純仁の光批判は、差役はまず一州一路で試行せよという純仁發言から推して、時期としては光正月「筭子」の「得旨」、差役法復活以前の論であろう。恐らくは李燾はこれを光役法における不備の傍證として、惇駁奏、詳定所設置とともに「得旨」以後、丁亥（二十八日）に繫けた。⑧百祿の助言もその意圖は同じであろう。乾學等Eは「差役」⑦に對應する⑧を、やはり丁亥に繫けてはいる。ただその措辭は、『紀事本末』のそれではない。明人四書のうち例えば應旂C卷四〇元年三月乙亥條が、『宋史』卷三二四純仁傳に採った、「按問自首之法」に關わる光への批判、これに續く「純仁素與光同志、及臨時規正、類如此」は⑧には無いが、同じく純仁傳に由來する「是使人不得言爾、若欲媚公以爲容悅、何如少年合安石以速富貴哉」等は、有る。「差役」⑦では、「若果如此、則是純仁不若少年合介甫求早富貴也云云」が、⑧「是使人云云」に對應している。純仁「行狀」に起源するであろう「是使人云云」、同「言行錄」に由來するであろう「若果如此云云」の、いずれを是ともし難い。文意の理解は後者がより容易ではあるが、乾學等は、應旂等明人四書、延いては『宋史』純仁傳に従っている。「差役」に有る純仁の、光の頑迷に對する慨嘆の語「是亦一王介甫」も、乾學等は——明人四書同様——⑧に採らない。

『紀事本末』「差役」丁亥條には、E◎軾の光批判に對應する記事は無い。この部分では特に、明人四書のうち應旂◎の繼承を、見出し得る。◎は『宋史』卷三三八軾傳・陳桎A・商輅Bをも繼承はするが、商輅までには無く宗沐Cにも認め得ない、應旂における蘇轍撰軾「墓誌銘」の引用を、繼承するからである。「墓誌銘」の一節に「差役行於祖宗之世、〈中略〉、先帝知其然、故爲免役、〈中略〉、行法者不循上意、於雇役實費之外、取錢過多、民遂以病、〈中略〉、君實爲人忠信有餘、而才智不足、知免役之害、而不知其利、欲一切以差役代之。方差官置局、公亦與其選、獨以實告、而君實始不悅矣。嘗見之政事堂云云〔傍點引用者〕とある。置局」は詳定役法所設置の謂である。應旂Cはここから「方差官署局、公亦與其選」を去り、「而才智不足」を「而通達不足」、「公」を「光」に改めるほかは、ほぼ逐語的にこれを三月乙亥條に引く。E◎は「爲人忠信有餘、而通達不足」、光を無能とする轍の酷評を去っている點では、『宋史』軾傳に回歸したといえるが、「軾獨以實告」は依然遺されている。「公獨以實告」はあくまでも「墓誌銘」における、轍の軾顯彰の語であり、史實として「編年」書に引用さるべきではあるまい。「墓誌銘」に據るならばむしろ、「方差官置局云云」が遺されるべきであった。詳定所が設置され、軾はその一員として光役法を批判した事實が、示されるからである。「差官置局」は『宋史』軾傳には有るが、Cのみならず他の明人三書も採つてはいない。「獨以實告」は軾傳には無い。乾學等は「墓誌銘」のみならず『宋史』軾傳にも遡及せず、専ら安易に應旂Cに採つた如くでさえある。ここでも詳定役法所の意味は稀釋された（『名臣碑傳琬琰集（中）』卷二六「蘇文忠公軾墓誌銘」）。

乾學等Eにおける應旂Cの繼承は、◎閏二月辛亥（二十三日）の、知樞密院事章惇の罷免記事にも窺える。同條には「惇與蔡確在位、窺伺得失、惇尤以諱侮困光、臺諫交章疏其罪惡、請黜之、未報〔傍點引用者〕とみえる。惇の「諱侮」も軾「墓誌銘」に起源する。「公舊善門下侍郎司馬君實及知樞密院章子厚、二人氷炭不相入、子厚每以諱侮困君實云云」とあるのが、それである。「諱侮」された光が軾に助を求め、軾が惇を諫めた結果光は、「少安」を得たという逸話が續く。「諱侮」自體は惇の知樞密院事解任における、直接原因ではない。小人惇によって一方的に加害された光が、軾によって救済されたという言説を以て「墓誌銘」は、軾の光に對する優位を宣明したのであろう。『紀事本末』「逐小人上」閏二月辛亥條章惇罷免記事には、「諱侮云云」は無い。應旂C同月同日條には、有る。應旂は同條において惇解任に先行し、軾「墓誌銘」「諱侮」逸話を逐語的に詳細に、引用する。しかも「墓

誌銘」では「諱侮」當時門下侍郎（執政官）であつた光の官銜を、僕射（宰相）に改竄してである。應旂Cにおける「及光爲僕射」は明らかに「諱侮」を、閏二月二日光の首相發令以後のことと、みなしている。ここに首相光に對する惇の「諱侮」が、その罷免の主要原因であるとの虚構が、成立する。乾學等EはCにおいて、「墓誌銘」の軾顯彰の語「獨以實告」を採る、應旂の不適切な引用を踏襲したばかりか、Cにおいても——逸話の逐語的引用こそ無いが——應旂に據り「諱侮云云」を踏襲し、かくすることでも應旂の虚構に加擔もした。畢沅も例の如くE^③「獨以實告」、^④「諱侮云云」を踏襲する。

『宋史』役法上から明人四書を経て、乾學等Eに至るまではほなべて、「小人」章惇の主張はその原文が抄録すらされず、簡略化された大意のみ示されるのに比べ、「君子」軾・純仁のそれは惇の場合よりは確實に詳細に紹介され、以て光にすら直言した兩「君子」の硬骨が、強調される。すでに多數の具體例に就いてみた、新たな追加例ではある。明人の四書を通じて、『宋史』役法上には有る夏料役錢の廢止、軾「墓誌銘」には有る軾の詳定役法官就任は、捨象された。乾學E・畢沅Fもこれを繼承したこと、前述の如くである。明清「編年」書六種を通じて、「紀傳體」史書でいえば志に關わる役法關連事項より、傳——それも「君子」の——に關する事項の採録繼承が優先された如くである。明清代に宋人の評價が固定された、その一端が、ここに露われているよう。評價延いては史觀の固定は例えば、元祐における「君子」の基本的一致を、虚構する。「君子」の直言はむしろ積極的に採録されても、「君子」間の深刻な内部分裂を窺わせる事例は、排除される。軾「墓誌銘」は、「政事堂」における軾の批判をうけ光が、「笑而止」としたあと、「公言用いられざるを知り補外を乞うも許されず、君實始めて怒り公を逐う意有り、其の病卒に會い乃ち已む〔傍點引用者〕』といい、その後も「多く君實の人」であつた時の臺諫が、競つて軾の「瑕疵」を求めたという。虚構に抵觸するかかの證言は、恐らくは『宋史』軾傳がこれを採らぬ故に、陳桎以後顧みられることは無い。いうまでもなく乾學等Eを踏襲した、畢沅Fは、かかる系譜の末端に在る。

Ⅲ、光と蘇軾

乾學等E◎は、「紀傳體」史料である軾「墓誌銘」および『宋史』軾傳、「編年」書である明人四書の系譜に連なるが、みたように特に應旂Cの影響が顯著である。陳桎AはE◎に對應する記事を閏二月「詔詳定役法」條「分註」、商輅Bは三月「罷免役」條「分註」に採録し、宗沐Dは三月乙亥條に繋ける。『紀事本末』「差役」二月丁亥條には、◎に對應する記事は無いが、乾學等はこれを同月「辛巳」——本來丁亥——條に繋ける。然るべき考證の結果であるよりは、明人の四書が一貫して、章惇駁奏・詳定役法所設置とともに、純仁の光批判と一括して軾のそれを、同一條——ないしは同一「分註」——に採録した既成事實に、安易に迫隨した故にほかなるまい。軾の發言は前後二段に大別できる。前段では、差役法を唐の府兵制、募役（免役）法を唐の募兵（長征）制に比擬し、後者から前者へは不可逆的であるとする。後段は、「墓誌銘」以下が「政事堂」における議論とするもので軾の所論に納得しない光に對する、「昔韓魏公刺陝西義勇、公爲諫官爭之甚力、魏公不樂、公道其詳、豈今日作相、不許軾盡耶」という、軾の語を伝える。墓誌銘に前段は無く、「差役行於祖宗之世、〈中略〉、獨以實告、而君實始不悅矣」に、後段「政事堂」における議論を續ける。乾學等E◎は恐らくは應旂Cに據り、「初差役行於祖宗之世、〈中略〉、軾獨以實告、而光不悅」の前に前段、後に後段を配す。『紀事本末』「差役」には前段に相當する記事は無いが、後段のそれは七月丁巳（二日）條に、有る。ただし「昔韓魏公云云」が「政事堂」における發言であるとは、いわない。發言の場には一切言及しない。前段は軾の『奏議集』卷三「辯試館職策問劄子」第二に起源し、李燾は元祐二年正月庚午（十七日）條に繋ける。役法議論の前に「臣前歲自登州召還、始見故相司馬光」の語が有るから知登州であった軾が開封に召還された、元豐八年末元祐初年初の交に、前段の議論は爲されたと推定し得る。『紀事本末』「差役」が後段相當記事を、七月二日に繋けるのは、この日に軾の詳定役法官辭任が、認められたからである。「差役」はまたその四月癸巳（六日）條に、中書舍人蘇軾の詳定役法官就任を、傳えている。「墓誌銘」および『宋史』軾傳は、「獨以實告」の前に「差官置局」し、軾も選に與かったという。「政事堂」における發言は——それが事實有ったとして——軾の詳定官就任以後、その辭任許可以前とみなすべきである。「差役」七月丁巳條所載の軾上奏に、¹⁴「臣先曾奏論、衙前一役、只當招募、不當定差、執政

不以爲然、臣遂奏乞罷免臣詳定役法、奉聖旨「不許」、經今月餘、前所論奏、並不蒙施行云云（傍點引用者）とある。一箇月以上前に解任を乞うたのは、「執政」と對立したからであるが、その對立點は衙前の問題である。李燾は『司馬公集』卷五三「申明役法筭子」を、六月甲寅（二十八日）に繋ける。該「筭子」において光は、諸色役人を一概に「定差」せよと主張した、自身の正月二十二日「筭子」が「得旨」した後、「雇募足らざれば方めて定差を行え」の「指揮」が有り、人が疑惑したと、不満を表わす。「指揮」自體は閏二月十五日詳定所建議に對する、裁可である¹⁵とみなし得るが、光は「雇募」「定差」の併用すら不可とした。「定差」を全面的に否定する軾との對立は、必然である。七月丁巳條軾の所謂「執政」は、光にほかなるまい。軾『奏議集』卷三「乞罷詳定役法筭子」「申省乞罷詳定役法狀」に據れば、解任要求は五月二十五日であり、七月丁巳條軾所奏の「經今月餘」と符合する。軾は七月初まで詳定官の職に在りはしたが、役法をめぐる「執政」光との對立は五月二十五日直前に、生起した。「昔韓魏公云云」はその時の、光の頑迷に觸發された語であり得る。さらに嚴密を期すならば五月十二日以後、二十五日以前であろう。正月二十一日以來足疾療養のため謁告（休職）していた光は、十二日延和殿に入對して、首相就任手續き「正謝」を行い、以て謁告を終えたからである。¹⁶「墓誌銘」以後乾學等Eまで繼承された、「政事堂」における軾の光批判は、決してE◎二月「辛巳」——ないしは丁亥——ではあり得ない（『長編』卷三九四／八―一二）。

光批判——後段——の當時軾が詳定官であつた事實は、『宋史』軾傳に據りさえすれば、容易に知り得るにも拘わらず、明人四書にはその言及が無く、乾學等E◎もまたこれを踏襲する。既に◎を二月に繋けている以上乾學等は、利用し得た『紀事本末』の、四月癸巳條詳定官就任、七月丁巳條同辭任の兩條はもとより、軾傳すらあらためて参照せず、専ら明人四書とりわけ應旂Cにのみ、據つたと考えられる。

「差役」二月丁亥條の呂公著建議に假りれば光正月二十二日「筭子」等には、「疎略未完備の處無くんば不^{あらず}」である一方、章惇の駁奏には「取る可き處」が有つた。光「筭子」は惇駁奏によつて論破されたといえる。詳定所設置の目的はこの光「筭子」における「疎略未完備處」の、彌縫である。彌縫のためには新たな人選が、必要であつた。三省・樞密院の構成人員（宰執）は、公著と光を除けば二月段階では依然、神宗朝以來の新法黨人である。「得旨」したとはいえ、惇の駁奏により缺陷を露呈せしめられた光「筭

子」につき、從來どおり三省・樞密院が議論すれば、差役法復活は覆えり得る。その故に別途詳定官として、韓維（侍講）呂大防（吏部尚書）孫永（工部尚書）范純仁（給事中）が、選任されたと考えられる。爾後大防・純仁が執政官（大防は尚書右丞、純仁は同知樞密院事）に陞進したから、軾の詳定官は兩名の闕の補填であつたであろう。ただ軾『奏議集』卷三「再乞罷詳定役法狀」——先引「差役」七月丁巳條所載——は、みた如く衙前は専ら招募すべきであり、定差すべきではないという。光「筓子」の趣旨とは、到底相容れない。就任二箇月にして早くも辭意を表わすに至つたのは、當然の歸結である。一旦は與えられた辭任の許可は、五月二十六日に撤回された。恐らくは御史中丞劉摯の發言が、これを然らしめた。軾の辭任を認めれば「則ち獨り議法成り難きのみには非ず、姦人をして伺隙乘機し法意を搖憾せしむ、國の計には非ざるなり」が、摯の論の一節である。辭任の不許可は、黨内對立の隱蔽のためであつた。彌縫しない限り實施し得ない光「筓子」における缺陷、軾という異分子の存在、その存在を秘匿しなければならぬ政治狀況、詳定所にはこれら元祐舊法黨政權における諸矛盾が、凝縮されていた（『長編』卷三七八／一二—一四）。

すでにみたように主に『宋史』役法上・同軾傳・純仁傳に據り、陳桎Aが閏二月および三月、商輅B・宗沐Cが三月、應旂が三月乙亥條に集約した、差役法復活に關わる諸情報は、乾學等E——およびこれを踏襲した畢沅F——では、量的に減少した。時の經過に伴う役法についての關心の減衰は、半ば必然であるとはしても、既に『紀事本末』に據り得た以上乾學等は、少なくとも月日に關わる考證において、明人四書とは格段に緻密であつて然るべきである。乾學等は『紀事本末』「用舊臣上」に據れば、正月二十一日以降五月十二日の延和殿における入對「正謝」まで、光が謁告していた事實を、知り得る立場に在つた。乾學等EがCを繋げた二月「辛巳」——本來は丁亥——には、軾は詳定官就任以前であるばかりか、光の謁告も依然繼續されつゝあつた。「政事堂」での役法をめぐる兩者の論争は、當然この日には有り得ない。乾學等Eはその閏二月甲辰（十六日）條に、恐らくは『宋史全文』卷一三上に據り、諫官朱光庭の發言を載せる。「今日廟堂之上、司馬光未出、唯有呂公著一人忠樸可倚、其餘皆姦邪、伏望聖慈早進范純仁、庶得賢者在位同心一德、以輔聖政（傍點引用者）」がそれである¹⁷。二月における「政事堂」での論争と、閏二月における光の「未出」は、相容れない。E(a)(b)(g)は、月日については『紀事本末』「差役」丁亥條に據り、記事の内容については應旂C

三月乙亥條のそれが、採られたであろう。「差役」と應旂Cとの折衷は、「差役」二月丁亥條には該當記事の無い◎にも及び、「辛巳」——丁亥——條に一括採録された。◎における月日考證の不備は果たして、例えば閏二月甲辰條朱光庭發言との間に不整合を生じたが乾學等はこれを放置し、畢沅Fも例の如く、これを是正してはいない。

軾の詳定官辭任を傳える『紀事本末』『差役』七月丁巳條は、軾「墓誌銘」の一節を「軾意以爲」以下に、「免役法弊當改、但不當於雇役實費之外多取民錢、若量出爲入無多取民錢、則不足以害民」と意譯した後、同意しなかった光に對する發言「昔韓魏公云云」を、續ける。軾「墓誌銘」が必ずしも忠實に引用されていないのは、李燾が撰者蘇轍の「私意」を、疑ったからであろう。『長編』卷三八二同月同日條李燾注は「按轍所作墓誌恐有私意、難盡信、今刪取之」という。「私意」に該當する具體例を李燾は、明示してはいないが、軾顯彰の語というべき「獨以實告」は採録されていない。⁽¹⁸⁾敢て「獨以實告」の採録を避け、「軾意以爲」以下を以てこれに代えた如くである。果たして「私意」の故であるか否か、判然としないが、李燾は「昔韓魏公云云」を「政事堂」での發言とする「墓誌銘」を自注に引きながら、正文には「昔韓魏公云云」のみ採り、軾發言の場は一切特定しない。光との論争の場が「政事堂」であるか否か、疑った故であり得る。軾の詳定官解任要求を結果した「執政」光との對立は、五月二十五日以前に生起したと想定した。對立以前「政事堂」における軾と光との接觸の機會は、自ずから限定される。同月十二日の「正謝」までは、光の謁告が繼續していたからである。しかも同月二日聖旨は、門下省・尚書省での執務および、都堂（政事堂）での聚議を、三日に一回に限る特權を、光に與えている。とりわけ光がこの特權を利用した場合、十二日「正謝」以後二十五日以前の十餘日、「政事堂」における兩者の接觸の機會は、三四回に過ぎない。「政事堂」での論争の有無は、微妙ともいえる（『長編』卷三八二／一）三、『司馬公集』卷五三「辭三日一至都堂劄子」。

詳定官と宰執の議論の場は専ら政事堂には、限定し得ない。先引軾「辯試館職策問劄子」の一節に、「及蒙差詳定役法、先與本局官吏孫永・傅堯俞⁽¹⁹⁾之流論難反覆、次於西府及政事堂中與執政商議、皆不見從、〈中略〉、因乞罷詳定役法云云（傍點引用者）」とみえる。まず軾の證言から、政事堂における宰執との「商議」は、有った。五月十二日「正謝」後であればそれは、光との議論でもあり得た。政事堂以外に宰執との「商議」の場として、軾は西府を舉げる。西府は東府とともに熙寧以來の、宰執の官舎であ

る。⁽²⁰⁾ 元豐八年七月以來宰執は、假日ないしは三省・樞密院からの退廳後、本來政事堂で行うべき聚議を、東西府で行うことを認められていた。⁽²¹⁾ 謁告中ではあっても、東西府という非公式の場であれば光は、これに参加した可能性は有る。例えば「近日臣の人微位輕者の如きを以てすら、久しく病假に在るを以て、執政猶お臣家に來至し公事を商量す」と光はいう。首相發令後「正謝」以前、執政は光が居住する東府に至り、合議した。論争の場が東西府であれば、その生起し得た時期は、軾が詳定官に就任した四月癸巳（六日）以後、翌月二十五日にまであるいは、擴大し得る。ただ「昔韓魏公云云」と軾に慨嘆させるに至った光との對立を、詳定官解任要求の直接の契機とは、みなさぬ場合においてである。對立の生起は五月二十五日直前として、誤りあるまい。ただしその場については「墓誌銘」の所謂「政事堂」以外に、東西府、特に光の居住した東府を、選擇肢に加えて得る。李燾が論争の場を特定しなかったのも、「政事堂」以外である可能性を排除し得なかった故であると、考えられる。いうまでもなく軾の「昔韓魏公云云」を、「政事堂」における發言とする蘇轍の證言は、閑却し難い。だが轍の提供する情報には、一抹の不信を拂拭し得ない場合も有る（『長編』卷三五八／七、同卷三七六／二五）。

IV、光と章惇

乾學等E◎閏二月辛亥（二十三日）條に次の如くいう。「章惇罷。司馬光・呂公著改更弊事、〈中略〉、惇尤以譴侮困光、〈中略〉。已而惇與光簾前爭論喧悖、至曰它日安能奉陪喫劍。太皇太后怒。〈中略〉。惇遂罷、爲正議大夫・知汝州〔傍點引用者〕。高氏簾前における——役法をめぐる——光との論争、その結果としての知樞密院事解任は、恐らく『備要』卷二十二閏二月「章惇罷」條「分註」に據った陳桎A以後、應旂Cまで繼承されている（宗沐Dには章惇罷免記事が無い）。章惇の暴言「它日安能奉陪喫劍（將來の地獄の道づれはまっぴらごめん）」は、『備要』「分註」には有るが明人三書には、無い。ただし『備要』では暴言「它日云云」よりはむしろ、韓縝が訴えた惇等の、哲宗定策僭稱が解任の直接の動機である。「它日云云」については、乾學等は『邵氏聞見録』に據ったであろう。みたように應旂Cはその閏二月辛亥條において、軾「墓誌銘」を改竄し、「僕射」光を「謫侮」した惇がさら

に簾前で光と役法をめぐり論争し、かくて解任されたという構圖を創る。E^⑥はこれに「它日安能奉陪喫劍」の語を加え、「小人」の「君子」に對する一方的加害、「小人」の敗退という物語を完成する。畢沅Fは例の如く、これを踏襲する。

蘇轍『樂城後集』卷一六「論御試策題箚子」二首は、紹聖初年（一〇九四）の上奏とみなし得る。該「箚子」第二「貼黃」はその冒頭に、「臣竊かに見るに章惇昔し樞密使に任ぜしとき司馬光と役法を争論す、其の言に曰う有り云云」という。轍が擧げる惇の發言の具體例のひとつは、「自行免役、所遣使者、不能體先帝愛民之意、差役舊害雖已盡去、而免役新害隨而復生、今日正是更張修完之時」である。字句に異同は有るが論旨からすれば、『長編』二月丁亥所載の、光正月「箚子」に對する駁奏の一節と一致する。⁽²³⁾ 轍の所謂「争論」とは、駁奏自體であるよりは、上奏後これをめぐり惇と光との論争が有ったとの、理解であろう。いまひとつの惇の發言例は次の如くである。「如京東西保馬緩一日、則民間有一日之害、此不可緩者也、如後〔役〕法、歲月之間、改更了當、誠不爲緩」。『長編』二月丁亥條は、詳定所設置を結果した惇の駁奏に續けて、『邵氏聞見錄』に據り惇の發言を著録する。「保甲保馬一日不罷、則有一日害、如役法、熙寧初以雇代差、行之太速、故有今弊、今復以差代雇、當詳議熟講、庶幾可行、而限止五日、其弊益甚矣」がそれである。この場合も字句の異同は有るが論旨は、轍の所引とほぼ一致する。李燾は『邵氏聞見錄』に據りはするが、伯温との間には見解に隔たりが、有る。伯温は光との論争の際の發言とみなし、惇のそれに「温公以不爲然」を續ける。これに對し李燾は、光に對するそれではあり得ぬとして、冒頭に「又嘗與同列争曰」を置く。李燾はまた惇の發言を——口頭の論争の語ではなく上奏された文字——「箚子」の一部とする、見解も示す。「曾布『日録』惇の此の語を載す、蓋し是れ箚子なり、當に檢詳追附すべし」と自注にいう。⁽²⁴⁾

閏二月庚寅（二日）詔は、この惇「箚子」が然らしめたであろう。該詔は、「二月初六日指揮（光正月二十二日）「乞罷免役錢依舊差役箚子」」に依る「定差」を命じる一方、州縣および轉運司・提舉司にそれぞれ兩月の期限を與え、「役法民間的確利害」を調査・報告させ、さらに差役の當事者、舊來免役錢を納め、今來差役さるべき人戸に各各利害を具し、「實封」自陳させよという。惇が批判した光正月「箚子」における「五日」の期限は、縣段階だけでも兩月に擴大された。州縣監司における調査・報告、當事者たる人戸の「實封」自陳は、惇の所謂「詳議熟講」の資料たり得よう。劉摯・王觀等臺諫の論難により、閏二月戊戌（十日）、

該詔は撤回される。例えば摯は、「實封之狀、州縣疲於遞送、其達於朝廷者、計須山積、則考謁何時可遍、而所謂差役之法何年可見其成也、不知誰建此論者、蓋欲爲遷延之謀・動搖之術」という。摯の立場からすれば「實封」自陳は、差役法復活日程の決定的遲滯を企圖した、明らかな悪意の所産にはかならないが、同時にこれによる、光正月「筭子」の缺陷のさらなる暴露も、危惧されたであろう。王觀は「實封」自陳を、新法黨宰執——首相蔡確罷免後は次相韓縝・中書侍郎張璪および惇——における、反差役法戰略の一環に位置づける。「故に初は則ち但だ司馬光「筭子」を録して行下し條目を立てず、以て則ち其の失を幸う、中は則ち惇出力して以て之を排し而して其の成るを恐る、終は則ち詳定の事畢るを待たず而して實封狀の法を爲り以て四方を惑わす」がそれである。三段階のうち「中は云云」が惇駁奏を指すのは、いうまでもあるまい。當該期役法につき、積極的に發言した新法黨宰執は、ほぼ惇に限られる。後にみる蘇轍閏二月十八日上奏の一節に、「今乃不候修完、便乞再行指揮使諸路一依前件『筭子』施行、却令被差人戶具利害實封聞奏、臣不知陛下謂惇此舉其意安在（傍點引用者）」とある。「實封」自陳（閏二月庚寅詔）は、惇「筭子」の建議に係ると認め得る。惇の駁奏は二月末の詳定役法所設置を、結果した。駁奏とは別に、光正月「筭子」に則り定差せしめる一方で、當役人戶に「實封」自陳せしめよという「筭子」も、閏二月庚寅以前に上奏した。伯溫が光との論争の語とみなした「保甲保馬云云」は、この惇「筭子」の一部であろう（『長編』卷三六七／一一、同卷三六八／七／九、同卷三六八／三二／三三、同卷三六九／二四／二五、同卷三六九／一四／一五）。

「保甲保馬云云」を光との論争の語とする伯溫の見解を、李燾は、「按ずるに光此の時已に病告に在り」といい却ける。駁奏の言説を信ずれば惇は、光正月「筭子」が「得旨」し行下されるに至るまで、殆ど役法議論に關預し得なかった。光「筭子」行下までの時系列を『長編』二月乙丑（六日）條に據り整理すれば、以下の如くである。①正月二十二日、光「乞罷免役錢依舊差役筭子」上奏、②二月三日、高氏光「筭子」を三省へ行下、③四日、三省「筭子」の檢討・進擬に樞密院の參加を要請、高氏許可、④五日、三省・樞密院「筭子」を檢討・審議（聚廳商量）、⑤三省・樞密院「筭子」施行を進擬、高氏裁可（進呈、得旨「依奏」）、⑥七日、「筭子」行下、差役法復活。惇はその駁奏冒頭において自身の役法との關わりを、概略以下の如く述べる。①役法は本來樞密院の職掌外であり、元豐八年秋から今春に至るまで、光も専ら三省と商議し、樞密は一切預聞しなかった。②役法に關わる上奏（筭子）

もなべて——高氏から——三省に降付され、その御封にも「止ダ三省ニ付セ」とあった。③従って三省が二月四日に進擬に樞密を加えるよう、要請した理由が判らない（當該條李燾注は、蔡確が樞密の参加を奏請したとする、公著『家傳』を引く）。④役法は所繫至大であるのに從來議論に加わらなかったため、光「筭子」所論の利害本末を考究する術も無かった。⑤二月五日三省と協議した際、この「筭子」は三五日かけ詳細に検討すべしといったが、韓縝が「司馬光の文字豈に敢て住滞すべけんや、來日便ち^{ただ}に須らく進呈すべし」といった。從來議論に加わり得なかつたばかりか、「筭子」も十分に検討し得なかつたので（「既不曾與議論又不曾細看文字」、「筭子」の利害については發言を差控えた。⑥六日の進呈（進擬）の際には「筭子」施行の可否は三省に一任し、關知しなかつた。三省と同一進擬し「奏ニ依レ」の旨を得たが、高氏にはこれまでの事情を申し上げた。⑦後日戸部が送ってきた敕文（行下された光「筭子」）を、曉夕反覆看詳し方めて疎略が甚だ多いことを見出した（『長編』卷三六五／一五、同卷三六七／四）。

惇の駁奏・「筭子」兩件の上奏自體を、光との「爭論」とはいい得まい。簾前あるいは政事堂等公的な場での、兩件をめぐる光との論争を、輒が「爭論」といったのであれば、妥當を缺く。惇が初めて役法に關預した二月四日以後、知樞密院事を解任された閏二月二十三日（辛亥）まで、論争の一方の當事者たるべき光は、依然謁告を繼續しつつあった。東西府における兩者の接觸を裏付ける、史料も無い。駁奏と「筭子」いずれをめぐる論争も、有り得べくもない。元祐初年輒は諫官であり、例えば伯溫より格段に正確に、役法をめぐる諸動向を知り得ていた筈である。その輒が同じ哲宗朝の紹聖初年に、かかる誤認を露呈するに至った理由は判然としない。ただ既にその「貼黃」に誤認を見出す以上、徽宗朝初その撰述に係る軾「墓誌銘」の、「政事堂」における論争にも、全幅の信を措き難い。乾學等^E「它日安能奉陪喫劍」も、従って、惇と光との簾前における論争の際の、語ではあり得ない。『長編』閏二月辛亥條は「保甲保馬云云」の場合と同じく、「同列」との論争の語とする。「及惇與同列爭論喧惇、有他日安能奉陪喫劍之語、太皇太后怒其無禮云云」がそれである。同條李燾注は、正月二十一日から五月十二日まで光は謁告し、惇が解任された時光はなお參暇（休暇明け）していない、樞密院と三省が光「筭子」を進擬したのは二月初であり（それ以後惇解任まで）、光は簾前に至り得ないとし、「伯溫必ず誤れり」と結論する。伯溫『辯誣』が、惇と光が簾前で役法を爭論し、惇の語「它日安能

奉陪喫劍」が、高氏に惇解任を決断させたと述べるからである。「奉陪喫劍」について李燾は、役法論争の過程で光「筭子」の故に發せられた語でありこそすれ、直接光に對して發せられた語ではないという。「或因爭論改法、爲光而發、非面與光語也」がそれである。『紀事本末』「逐小人上」閏二月辛亥條惇罷免記事には、この李燾注は無い。

同じく惇の發言を採りながらE^④とb^⑤とでは、乾學等に一貫性が缺如している。b^⑤「保甲保馬云云」の場合乾學等は、『紀事本末』「差役」二月丁亥條と同じく、これを惇と「同列」との論争の語（又嘗與同列爭曰）とする。「差役」當該條に、光との論争を不合理とする李燾注が、無いにも拘わらずである。一方c^⑥は、「逐小人上」における「及惇與同列于簾前云云」を採らず、敢て明人三書に従い光との論争の語とする。應旂Cに倣い「謗侮」も加えられ、「奉陪喫劍」とも相俟つて、惇の「小人」が強調される。先行する三書——および邵伯溫——の拘束力を示す、一例證ではある。だが一面では、『紀事本末』「用舊人上」に據れば獲得し得た、光謁告期間についての的確な理解の、乾學等における缺如も指摘できる。いうまでもなく畢沅Fは、特に『長編』二月丁亥、閏二月辛亥兩條李燾注を、利用し得る立場に在った。Fにおいては乾學等のこの不備は、解消されていて然るべきである。だがその二月、「丙子」——丁亥——閏二月辛亥兩條も例の如く、E^④b^⑤c^⑥の踏襲に過ぎない。別稿における文彦博平章軍國重事就任の事例同様、畢沅において李燾注が果たして、検討の対象であり得たかすら、疑問である。²³

V、光と蔡京

乾學等E^④二月辛未（十二日）條は次の如くであり、畢沅F同月同日條もこれを踏襲する。「司馬光復差役法、既得旨、知開封府蔡京、即用五日限、令兩縣差一千餘人充役、亟詣東府白光、光喜曰、使人人如侍制、何患法之不行乎。議者謂、京但希望風旨、苟欲媚光、非其實也」惇の「保甲保馬云云」と同じく『紀事本末』「差役」二月丁亥條當該部分④とほぼ一致し、その故に、應旂C・宗沐Dに至るまでの「政事堂」が「東府」に、改められてはいる。だが「奉陪喫劍」を惇の光に對する簾前での發言として、光謁告についての理解缺如を露呈している以上、乾學等が、京の光に對する報告の場が、「東府」である必然性を、認識していたとは

みなし得ない。「政事堂」と「東府」との異同は恐らくは、乾學等において重要ではなかった。乾學等が敢て『紀事本末』『差役』を採ったのは、『宋史』卷四七二京傳・明人四書には無い、「議者謂、京但希望風旨云云」が、有った故であろう。光に雷同した京の卑小、その「小人」性の指摘に着目したと考えられる。

『長編』二月丁亥條當該部分は、伯溫『聞見錄』および紹聖三年十二月己未の侍御史董敦逸上奏に據ると、李燾注はいい、二者と敦逸に對する京の反論を載せる。李燾はここでも光謁告の期間を明示したあと、「此の時溫公臥家しあれば伯溫の所聞必ず誤れり、或は溫公嘗て京を召し東府に至らしめしか」といい、「政事堂」を却ける。「東府」を選択した李燾の根據は京の反論であらう。紹聖の當時翰林學士承旨であつた京は敦逸の彈劾に對し、①開封府は自來京城内の公事のみ管勾し、役法は諸縣が擔當した、②開封・祥符兩縣は——詔令として——行下された光正月「筭子」内に「即便施行せよ」と有った故に、ただちに施行した。③開封府は諸縣の法文遵守を禁止し得ない、④だが敢て坐視せず、點檢等の名目で諸縣に差官し看詳商量させた、⑤閏二月には、諸縣が申到した「未可施行事」につき、本府が上奏するか或いは、提點府界諸縣鎮公事司に看詳させるかを乞うた、⑥敕命により提點司と同具聞奏せしめられた、⑦これにより臣が——光に雷同したのではなく——可否を論列したことは證明できる等と反論し、「其司馬光、因此三次召臣到東府、詰責不差衙前、并有何利害差官相度因依、怒見辭色云云〔傍點引用者〕」という。謁告直後の光の三省宛書簡に、「前日蔡尹來言、開封有巨盜云云」とみえるから、京の「東府」訪問は必ずしも、役法をめぐる「三次」ばかりではない。ただ李燾所引の限りでは京自身も、次にみる敦逸も、光「筭子」「得旨」五日後の光に對する報告には、言及していない。謁告中の光への報告が、事實有ったとすればその場合は、「東府」以外ではあり得ないが、既に『聞見錄』同一條が、實際には有り得ぬ簾前での惇と光との論争を伝える以上、京の報告の有無自體も、あるいは疑い得る。その有無がいずれであるにせよ、京が開封・祥符兩縣における、短時日での差役法回歸——光「筭子」の「即便施行」——を、少なくとも阻害していない事實は、看過さるべきではない（『司馬公集』卷六三「三省咨目」）。

『長編』二月丁亥條は末尾に「故蘇轍首以爲言」七字が有る以外、當然ながら、乾學等E④とほぼ同文である。光の語「何患法之不行乎」までは、「令兩縣差一千餘人充役」を恐らくは敦逸上奏に採る以外は、主に伯溫『聞見錄』に據る。「議者謂、〔中略〕、

非事實也」は、敦逸上奏の李燾による要約と考えられる。⁽²⁷⁾「元祐初司馬光秉政、蔡京知開封府、光唱京和、首變先帝之法、行下諸縣、各〔欲?〕希望風旨、只〔如?〕祥符一縣、數日之間、差撥役人一千一百餘人、是後行於畿邑、遍於諸路、皆是蔡京首爲從順、何其變之速也云云〔傍點引用者〕」が、李燾注所引の敦逸上奏である。京の光への附和、祥符縣における「差撥役人」が諸路の差役復活の、濫觴となったと敦逸は弾劾する。李燾はあるいは、「議者（敦逸）」の發言「希望風旨」等に假りて、自身の蔡京觀を再確認した如くではある。だが紹聖新法黨政權下において彈劾さるべき惡と、元祐におけるそれとは、自ずから異なる。李燾の所謂「故蘇轍首以爲言」は、いささか誤解を與え易い。『宋史』京傳は、「政事堂」における京の光への報告を傳えたあと、「已而臺諫言京姦邪壞法云云」という。祥符等における「五日」以内の「差撥役人」を、元祐の臺諫は、差役法に對する破壊行爲とみなした（『長編』卷三六七／一五／一七）。

轍等元祐の臺諫の主張を理解するためには、「五日」について知る必要が有る。「五日」は、差役法を復活すべき期限ではない。縣が、差役を實施するうえでの、地域差等阻害要因——「妨礙」——を、州に上申するに際し與えられた期限が、「五日」である。最終的には、上申は轉運司に集約され、轉運司はその「可取者」を一季内に具奏し、「一路一州一縣敕」が作成されることとされた。ただし「妨礙」が無い場合、差役を「即便施行」しなければならない。正月二十二日上奏に係る光の「乞罷免役錢依舊差役筭子」にいう。「然尚慮天下役人利害逐處各有不同、〔中略〕。若依今來指揮別無妨礙可以施行、即便依此施行、若有妨礙施行未得、即仰限敕到五日内、具利害擘畫申本州、仰本州、類聚諸縣所申、擇其可取者、限敕到一月内、具利害擘畫申轉運司、仰轉運司、類聚諸州所申、擇其可取者、限敕到一季内、具利害畫一奏聞。朝廷候奏到、委執政官再加看詳、各隨宜修改、別作一路一州一縣敕施行云云〔傍點引用者〕」「具利害擘畫」とは、問題點（妨礙）を指摘しその對應策を提示する意であろう。王觀等臺諫の抵抗により廢案となった所謂「實封狀之法」——惇「筭子」——は、轉運・提舉司および州縣にそれぞれ、二箇月の期限を與えている。特に州縣には大幅な報告期限の延長を認める、光「筭子」の修正案であった。惇はその駁奏で、州縣の「擘畫」は所定の期限内には實行不可能であり、「筭子」當該部分は空文に過ぎぬと斷定し、「且諸縣既に迫るに五日の限を以てすれば苟且施行すら猶恐らくは暇あら^{いし}ず、何に由りてか更に利害を具して申陳すべき、諸州何に由りてか擘畫すべき云云」と論ずる。開封・祥符兩縣では惇の所謂「苟

且施行」が、強行されたのである。

右司諫蘇轍は、李燾が閏二月庚寅（二日）に繋ける上奏においていう。「臣近奏乞取問開封府官吏、明知熙寧以前舊法役人數目顯有冗長、並不依近降指揮相度申請、便盡數差撥、及朝旨本無日限、輒敢差人監勒、於數日內蹙泊了當、故意擾民、以壞成法云云〔傍點引用者〕」「近降指揮」とは、「妨礙」が有った場合五日以内の「具利害壁畫」を縣に——州の場合一月以内——命じることとした、光「筭子」の一節をいう。「又朝旨云云」に明らかたように、光「筭子」には差役施行の期限は、具體的には示されていないかった。光「筭子」が主張する、熙寧以前の役人額への回歸は疑うべくも無く、「妨礙」であるにも拘わらず、開封・祥符兩縣はこれを具申すること無く、「筭子」に則り差撥を強行した。轍はこれを差役法に對する破壊行為とみなす。同じく轍の同月丙午（十八日）上奏にいう。「訪聞、近日諸路監司州郡、多以二月六（七）日所降差役指揮有不便事節、未敢便行、各具利害奏聞、顯見事理明白人情不遠、苟無挾邪壞法之意、誰不論列。獨蔡京以侍從之臣居首善之地、更無一言、只于數日內催迫了當、用意不臧、深可忿疾云云」光「筭子」——「差役指揮」——の「不便事節」を「奏聞」することこそが妥當であり、「論列」せず「便行」した蔡京には「挾邪壞法之意」が有り、「用意不臧」であるとの論である²⁸。京は光への雷同の故に彈劾されてはいない。

轍の十八日上奏は冒頭で、惇をも糾弾する。惇は三省とともに光「筭子」を審議した際、その「疏略差誤」を知りながら、三省に雷同して簽書し、「筭子」の「得旨」行下後に駁奏した。駁奏したにも拘わらず、一方で「筭子」に依遵して差役法（定差）を施行させ、一方で差役される當事者（被差人戸）に、利害を具して「實封聞奏」させるよう乞うている（「實封狀之法」）。「被差之人」に「筭子」の「不便」を痛感させ、「人人司馬光と敵と爲」らしめようとしたとし、「但だ光の言の不效を得れば則ち朝廷利害は顧みず」と、轍はいう。京と惇とに對する彈劾からすれば、光「筭子」の教條主義的遵守、あるいは一部修正を施したうえでのその維持さえもが、差役法への破壊行為と斷ぜられている（『長編』卷三六八／一二一—一二三、同卷三六九／一四一—一四六）。

王觀は、新法黨宰執の反差役法戰略を三段階に分けた。惇の建議に係る「實封狀之法」が「終」、その駁奏が「中」であり、兩者に先行する第一段階を「初則但録司馬光『筭子』行下、不立條目、以幸其失」とする。二月二日に「得旨」した正月二十二日光「筭子」は、施行細則等附帶事項を一切加えぬまま、翌七日に行下された。轍はいう。「兼ねて臣竊かに觀るに司馬光前件『筭子』

條陳せる差役事件大綱已に允當を得たるも、然れども其の間疏略を免かれず及び小か差誤有り、執政大臣豈に知らざる有らんや、若し公心共濟せんとすれば即ち合に光の所請に據り大意を推行し小節を修完し然る後行下すべし、今但だ『筭子』を備録し前に光の姓名を坐し後に聖旨『奏ニ依レ』を坐するのみなるは、其の意知る可し、今自り以往其れ必ず人中外異同の論に借り以て大議を揺動する有らん。修正・補足を施されず行下された「筭子」原文は、その「疏略」「差誤」等不備の故に、必然「異同の論」を惹起し、これを反差役法の議論に利用し得る。敢て光「筭子」を行下した、新法黨宰執の意圖はこれであるというのが、轍の主張であろう。既に、行下された「筭子」に光の姓名が附されている以上、役法の不備への不満は容易に、光の責任追及に直結し得る。光の權威の低下ないしは失墜は、爾後の役法の如何のみならず、當時なお基盤の脆弱な舊法黨政權の存続にも影響し得る。轍はあるいはこれをすら危惧したであろう。轍の所論を敷衍すれば、例えば光「筭子」を維持しつつ實施される「實封狀之法」は、差役法に對する新法黨宰執の消極的抵抗、遲滯策であるよりはむしろ、「筭子」不備指摘の機會を當役人戸（被差人戸）にまで擴大し、ついには「筭子」自壞の促進を目指す、確信犯的積極策にはかなるまい。光の正月二十二日「筭子」はその「疏略」等不備の故に、それ自體が、差役法復活の阻害要因であり得た（『藥城集』卷三六「論罷免役錢行差役法狀」、『長編』卷三六六／一一～一二）。

光の「筭子」が縣に與えた期限「五日」を、惇は「太迫」と評するが、「筭子」が三省に下されて以後、「得旨」行下に至るまでの日程も、「太迫」の毀りを免かれない。すでにみた如く、李燾および惇駁奏冒頭郎分に據れば、正月二十二日上奏された光「筭子」は、二月三日の三省への行下まで略十日、留中された。惇等樞密院官を加え、内容が検討・審議（聚廳商量）されたのは、僅かに二月五日一日に過ぎない。事前に惇を除く三省のみの商量が有ったとしても、最大三日・四日兩日が、それに充て得た時日である。「筭子」の可及的速かな實施を、高氏が指示した形迹を、惇の發言には見出し得ない。日程の「太迫」は呂公著を除く、蔡確等三省宰執の選擇に係るであろう。かかる選擇にはいうまでもなく、「筭子」の「大意」を尊重する故に、修正を加えながらその熟成を期す善意は、窺い難い。駁奏に據れば惇は、「筭子」の検討には「三五日」を要するとの見解を示した。だが恐らくは三省は、二月三日・四日の間にすでに、「筭子」の「疏略」等不備を検知し、その利用價值を確信するとともに、早急に「得旨」施行することと合意した。惇に據れば三省は前年秋以來光とともに、役法を商議していた。自然光の主張の骨子はすでに知悉され、「筭子」

における「疏略」等の摘出は、比較的容易であつたであらう。光は謁告直後——正月二十一日であらう——その三省宛書簡（「三省咨目」）において、役法をめぐる上奏を豫告しているから、これを想定し、高氏からの行下までの間具體的對應を、協議し得たであらう。惇駿奏からすれば二月五日の聚廳商量において、「筭子」についての實質審議が爲された形迹は、無い。次相韓縝の發言に對する特段の異議も、見出し得ない。既定路線延いては事前謀議の存在を、傍證するであらう。縝の「司馬光の文字豈に敢て住滯すべけんや云云」は、光の權威の尊重に藉口し、「筭子」の無修正を正當化しつつ、既定路線の追認を迫つた發言とみなし得る。

無修正のままの光「筭子」行下に、新法黨宰執が、黨派の利益を見出したとすれば、聚廳商量前日に參加を要請した惇に、彼らが期待したのは、「得旨」行下以前における「筭子」の論破ではあるまい。論破であるにしても行下後のそれである。行下施行されその「疎略」が、多數の前に明らかとなつた「筭子」に對する論破は、より效果的でもある。惇はその駁奏で、自身が決定に至るまでの過程における、いわば局外者であると主張する。例えば「既不曾素與議論、又不曾細看文字、其間利害斷未敢措詞云云」がそれである。惇は、蔡確が商議への參加を要請した故に、役法についての發言權を得た。その參加が聚廳商量の前日である故に、決定過程への關預稀薄な局外者を、主張することを得た。いうまでもなく確等三省宰執と惇との、事前の通同は疑うべきである。

かかる一貫した對差役法ないしは、對司馬光戰略を想定し得るならば、蔡京における「五日」以内の役人差撥も、その一環にはかならずとみなすべきである。光「筭子」の忠實な實施は、京一個の資質に由來する雷同ではあり得まい。乾學等E④は、恐らくは『紀事本末』『差役』二月丁亥條から、「故蘇轍首以爲言」七字を削除した。「差役」は、轍が開封府官吏と京を彈劾した、その閏二月庚寅上奏を採録するから、乾學等は、開封・祥符兩縣における役人差撥を、元祐の臺諫が如何に論じたかその一端を、知り得る立場に在つた。畢沅Fは李燾注に據つて「議者」の所謂「希望風旨」が、紹聖の御史敦逸の語であり、元祐の臺諫のそれではないことを、知り得た。『長編』所載の轍を始めとした元祐臺諫の發言を通じ、光「筭子」とその實施が如何なる問題を派生し得たかも、知り得る立場に在つた。だが乾學等より惠まれた史料環境を活用し、章學誠の所謂「推廣」に努めてはいない。

敦逸の彈劾を採用した點で、李燾の責仕も問われるべきであらう。李燾は伯溫の京に對する論評「眞小人耳」の補強材料として、敦逸の語を採つた如くである。「蔡京前後觀望反覆、賢如溫公、暴如子厚（惇）、皆足以欺之、眞小人耳」と伯溫はいふ。元祐初に

は光「筭子」に従い役人を差撥したにも拘わらず、紹聖初には宰相惇に、雇役の復活には熙寧・元豐の法を用いさえすればよいと助言したとして、伯温はかく論評する。伯温は京を、政權黨がいずれであるかにより、随時雇役と差役を使い分け上位者に雷同する、定見無き機會主義的「小人」とみなした。李燾による敦逸彈劾の要約「議者謂云云」にも、かかる伯温の京評價が投影されていると思われる。いうまでもなく想定の中、元祐初の役人差撥が、反差役戰略の一環でもあるならば、紹聖の惇への助言との間に蔡京において、責められるべき特段の矛盾は無い。一方李燾が、傳聞から抽出された伯温の所見の補強を期すならば、本來元祐初年の事例を用いるべきであった。だが當該期の轍を始めたとした臺諫の發言に、京の光への雷同、雷同故の光「筭子」の「即便施行」を糾弾したそれは、見出し難い。その故に李燾は、「希望風旨」を彈劾する敦逸の語を以て、これに代えたと考えられる。南宋人李燾は恐らくは、「政事堂」の當否以外は伯温の所見、その提示する蔡京像に賛同する故に、かかる「編年例」に抵觸する操作を、施したのであろう。敦逸の彈劾は、「希望風旨」等語句のうえではあるいは、伯温の所見を傍證し得るにはしても、李燾自身が指名した轍の發言、例えば「蔡京知開封府、〈中略〉意欲擾民以沮成法云云」³¹は、その傍證資料ではあり得まい。李燾は矛盾を露呈した。

『宋史』京傳に據つたであろう明人四書には、當然ながら、李燾の「議者謂云云」は無い（ただし京傳の「已臺諫言京挾邪壞法云云」も無い）。乾學等E④は『紀事本末』「差役」に據り「議者謂云云」を繼承し、畢沅F二月辛未條はこれを踏襲した。兩者は李燾を介して伯温における、「眞小人」蔡京の像を傳承したといえる。『長編』の場合は末尾に「故蘇轍首以爲言」七字が有る故に、これを手掛りに、元祐初年の蔡京が必ずしも伯温におけるその像に、符合しないことを知り得る。七字を削除したE、これを踏襲したFにはその餘地は無い。しかもEは、開封府官吏と京とを彈劾する、『紀事本末』「差役」閏二月庚寅條轍上奏を、Fは『長編』所載の京等を彈劾する當時臺諫の一連のそれを、採録しない。この一條——E④、F二月辛未條——からすれば、伯温以來の蔡京像の固着は、明人四書以上に進行した如くである。無修正のままの光「筭子」行下を、新法黨宰執の惡意とみなす、例えば——『紀事本末』「差役」に有る——轍の「論罷免役錢行差役法狀」も、兩者は採録しない。蔡京の役人差撥を契機に暴かれたといえる、光「筭子」における舊法黨にとっての負の側面も、結果的にではあれ、ほぼ隱蔽されるに至った。

結語にかえて

乾學等Eには——多分に『紀事本末』に據り得た故に——明人の四書に比べ、改善された點を認め得ないわけではない。だが別稿において主に明人四書に見出し得た、いくつかの特徴——往往にして負のそれ——もまた、皆無ではない。例えば元祐元年二月から三月に露われる、日付(干支)の混亂は、正史たる『宋史』の尊重ないしは偏重が、これを招いたであろう。軾「墓誌銘」に起源する「獨以實告」「謗侮」の不適切な引用は、應旂Cの繼承であり、先行する「編年」書の後續のそれに對する、拘束力が然らしめたであろう。元豐八年五月の光の門下侍郎就任記事では、軾撰光「行狀」「宋史」光傳と『紀事本末』との、折衷が試みられているが、光の上奏二首「乞去新法之病民傷國者疏」と「請更張新法劄子」とを混同する等の、破綻を結果した。「紀傳體」史料を「編年」體に再構成するに際し、慎重さに不足した故であろう。

少なくとも光をめぐる諸例については、畢沅Fは、ほぼEの逐字的踏襲に終始した。Eが依據した『紀事本末』では省略されることが多い李燾注を、畢沅は『長編』に據つて參照し得た。例えば既に李燾注が再三に涉り、光の謁告期間への注意を喚起している以上、畢沅は、簾前における光との論争が惇を解任に至らしめたという、連綿Eまで傳承された虚構を、修正して然るべきであった。だが畢沅はEを踏襲し、虚構は維持された。『長編』等を利用し得る故に、章學誠は畢沅に、宋代史の「推廣」を期待した。光をめぐる諸例にみる限り「推廣」の成果は、皆無といえる。

明人四書における、多分に『宋史』に由來する人物像は、乾學等E・畢沅Fに繼承され、その定型化はEFに至り、むしろ強化された。南宋ですでに理想化されていた光の場合、神話としての定型化であろう。かかる神話が、宋代役法に對する關心の稀薄化と相俟つて、光のいわば差役法原理主義の精髓ともいふべき正月「筭子」が、胚胎した諸問題あるいは「筭子」が派生したそれを、乾學等——および畢沅——に捨象させた、一因を爲したであろう。光の謁告期間も、もし神話が前提とされるのであれば彼らにおいて、瑣末な問題であり得る。だが光の最晩年である元祐元年の九箇月——光は九月初に死去⁽³²⁾——の過半およそ百五十餘日、光は謁告していた。八月丁酉(十二日)「疾作るを以て」政事堂を早出し、再度謁告したからである。その宰相在任期間は、五月十二

日「正謝」から数えれば、再度の謁告期間を加算してさえ、三箇月餘に過ぎぬともいえる。「正謝」以後も高氏簾前で、公著等宰執との議論に参加したのは、『長編』に據る限り八月辛卯（六日）にのみ、これを認め得る。「正謝」以後の光の、門下省・尚書省における執務の実體は、詳らかにし得ない。だが少なくとも、政事堂における宰執合議（聚議）および、簾前における議論の主導は、恐らくは極めて稀れであった。想定のおくであるならば、宰相光の在り方は他の北宋のそれと比べ、異例といえる。實態は判然とはしないが、「正謝」以前の光と執政の間に、東府における「商量公事」が有った事實は、疑い得ない。だが閏二月二日首相を發令されたとはいえ、「正謝」以前の光は、正規のそれとはみなし難い。首相を發令されている以上その門下侍郎（執政官）は、すでに舊官であるともみなし得る。この間光の資格が問題とされた形迹は無いが、かかる立場に在る光が、東府の「商量」——非公式の聚議——を通じ政局を主導したとすれば、これも異例に屬す。四月初までは韓縝が依然次相であつたから、これ以前は、上奏に先行して東府での「商量」が有つたとしても、その場で宰執の總意が集約されたとは、みなし難い。「商量」からは新法黨系宰執が、排除された可能性もある。李燾は光が、正月二十八日以降も「凡そ十有三旬」謁告したが、「然れども奏疏相屬ぐ」という。三省・樞密院に對する「咨目」等書簡を除けば、高氏への上奏が謁告中の——あるいは「正謝」後も——光の政治活動の、主體であつたであろう。特に平章軍國重事で決着するに至つた文彦博人事においては、宰執との協議の形迹を見出し得ない。三月までには呂公著以外にも、呂大防・范純仁がそれぞれ、尚書左丞・同知樞密院事として執政官に加わつてはいた。だが前年の光の「初除門下侍郎の日」以來、一貫して彦博人事は、光の密奏とこれに對する——宦官を介した——高氏の回答を以て、進行した。同列との合議を拒否して君主との間に形成する、かかる閉鎖性も、異例以外ではない。『長編』に據れば知り得る、神話とは必ずしも適合しない諸例を、畢沅は顧慮してはいない。彦博人事については別稿にみた如く、乾學等の誤認を踏襲している。一方で章惇と蔡京をめぐる負の神話は、着實に繼承された、とりわけ京の事例においてはこれを介して、役法をめぐる黨争の實態等を摘出し得るにも拘わらず、ことは京一個の卑小さに、矮小化された（『長編』卷三八五／八、同卷三八四／一五―一七）。

〈附記〉

兩者をめぐる負の神話は、少なくとも宮崎市定には繼承された。ともにその概説書ではあるが、『北宋史概説』では、「章惇は、始めて司馬光と太后の前で論戦した。〈中略〉。これには司馬光も返答に窮して大いに赤面した」といい、『中國史』では、蔡京を政治に信念や節操をもたぬ「便宜主義者」とみなし、「大臣の司馬光は、五日を限つて差役法を復活せよ、との緊急命令を出した。〈中略〉。知開封府であつた蔡京は一日のうちに新法を改めて、舊法による差役法を復活したと報告して司馬光に賞められた〔傍點引用者〕⁽³³⁾」という。前者は、『長編』惇駁奏と伯溫『聞見錄』、後者は『聞見錄』に據つたであろう。後者では宮崎は、紹聖における京の惇への助言も紹介している。前者では、惇の簾前における光との論争という虚構が繼承されている。「大いに赤面した」は虚構の増幅である。後者では、「五日」の意味を誤認しあまつさえ、「一日のうち云云」と新たな誤認を累加している。「緊急命令云云」は、當時光が謁告中であつた事實を、宮崎が知り得ていなかったことを示す。「便宜主義者」は伯溫の所謂「眞小人耳」という京評價、矮小化の繼承であろう。

注

- (1) 「司馬光傳承數則——明清「編年」書六種における——」(『東北大學東洋史論集』第二二輯——寺田隆信博士追悼論文集——、二〇一六)。文中における「別稿」は皆これを指す。
- (2) (1) 別稿参照。
- (3) (1) 別稿参照。
- (4) 『宋史』哲宗本紀八年五月には、「丙辰、賜禮部奏名進士・諸科及第出身四百六十一人。戊午、以蔡確爲尚書左僕射兼門下侍郎、〈中略〉、章惇知樞密院、司馬光爲門下侍郎」とあり、應旂C同年同月には、「丙辰、賜禮部奏名進士・諸科及第出身四百六十一人。是科得謝良佐。以蔡確・韓縝爲尚書左右僕射兼門下・中書侍郎、章惇知樞密院事。詔起司馬光知陳州、光過闕入見、留爲門下侍郎云云」とある。『宋史』光傳には「起光知陳州、過闕、留爲門下侍郎云云」とみえる。應旂は恐らく本紀に據り戊午條に、光の門下侍郎の就任を記す豫定であつたが、「戊午」二字を脱落させた。しかも陳樞A・商輅B

(5) では「以司馬光爲門下侍郎」條「分註」に引く『宋史』光傳「起光知陳州」を、「章惇知樞密院事」に接續したため、「編年」書の體裁を害うに至っている。宗沐Dも「章惇知樞密院事」に『宋史』光傳を續ける點では、應旂Cに共通する。ただ宗沐の場合戊午條直前に、光の「開言路」要求記事「司馬光居洛十五年、〈中略〉、光請開言路、〈中略〉。於是上封事者千數」を配し、光の門下侍郎就任に至る経緯は、Cより判り易い。ただしかかる構成は商輅Bの、「司馬光自洛入臨夏五月詔求直言」條および「分註」、「以司馬光爲門下侍郎」條および「分註」の踏襲であり、この場合は、宗沐が應旂より藍本商輅Bに忠實であつたに過ぎない。

(6) 因みに應旂C丙辰條、宗沐D戊午條はいずれも羅從彦「尊堯錄」卷七の光批判「乃曰『以母改子、非子改父』以此過衆議則失之矣。其後至紹聖時、排陷忠良、以害于治、豈亦光有以肇之邪」を載せる。從彦の論は陳樞Aに無く、商輅Bには有る。「四庫全書叢目提要」は應旂が商輅Bを藍本としたという。宗沐DにおいてもBはその藍本であろう。

(7) 『長編』卷三五六／六同月同日條に「詔責授汝州團練副使本州安置蘇軾、復朝奉郎知登州」とある。何掄『眉陽三蘇先生年譜』に據れば、この年十一月登州到任五日にして、禮部員外郎を以て召還されている。

(8) 乾學等が、門下侍郎を光が「復辭」したとするのは、後出の『司馬公集』「辭門下侍郎」第二劄子」に據るであろうが、誤認である。該「劄子」はその自注にみるように「不上」におわつた。乾學等は自注を看過したのである。

(9) 「乞改求諫詔書劄子」は後にみるように、「辭門下侍郎第一劄子」請更張新法劄子」とともに、五月二十八日に上奏されたと考えられる。『長編』に據れば、光の知陳州發令は四月丁丑（十四日）、「過闕」「入見」を命じられたのは五月乙未（三日）である。

(10) 該「劄子」には「臣昨奉聖旨令入見、於今月二十三日到京、蒙降中使以五月五日詔書賜臣看閱云云」とみえる。該「劄子」は「五月五日詔書」に對する反論であるが、光が「詔書」を「看閱」したのは、五月二十三日の「到京」以後である。該「劄子」が上殿（入見）に備えて執筆されたのも、同日以後でなければならない。知陳州發令以前にこれを載せるのは、「行狀」であっても、妥當を缺く（『長編』卷三五四／六、同卷三五六／二）。

(11) 『司馬公集』卷四七は、「第二劄子」に續けて、高氏「手詔」および「再降詔云云」の「傳宣」を載せる。

(12) 「乞改求諫詔書劄子」および、『司馬公集』卷四六「乞開言路劄子」、同卷四七「乞開言路狀」三件は、一連の上奏である。三月三十日——『長編』は同月壬戌（二十九日）に繋げる——の「乞開言路劄子」で光は、最優先されるべき施策として、人の有官と無官とを問わず朝政闕失につき、實封狀を以て上奏させ、下情を上通させよという。李燾所引の「元祐密疏」に據れば四月二十九日上奏に係る「乞開言路狀」は、「開言路之詔」が下されぬ段階で宋彭年・王誥が、職分外の發言（非其本職而言）を以て處罰されたことに抗議する。「乞改求諫詔書劄子」は、「五月五日詔書」が一方で光の建議を「采納」しながら、一方では「陰有所懷」「犯非其分」等六箇條に抵觸した場合、これを處罰するとした點を、批判する。「五月五日詔書」が「求諫詔書」である（『長編』卷三五三／九一〇、同卷三五六／二四、同卷三五四／五、同卷三五四／九一〇）。

(13) 乾學等E庚申（三日）、『紀事本末』「差役」己未（二日）を比べれば、庚申が妥當であろう。『宋會要輯稿』食貨一三免役錢は、當該記事を元年三月三日に載せる。『長編』もこれを三月庚申に繋げる。『長編』と「差役」との相違の理由は、判然としない。

(14) 明人四書における詳定役法所については（一）別稿參照。李燾所引の『舊 哲宗實錄』は、「蓋自光遽變差役之法、州縣承行擾攘、民被其害、朝廷悟其非、故置局詳定焉（傍點引用者）」という。特に新法黨からすれば詳定所の設置は、光「劄子」の施行が結果した混亂の、彌縫策であつた（『長編』卷三六七／一七）。

- (13) この場合には、①本紀に則り辛未條から始まる元年三月の草稿が爲られた、②後に己未・庚申・庚午條の遺漏が発見された、③己未條以下が辛未條の前に挿入された、④だが「三月」を己未條に移すには至らなかった、という経緯を想定し得る。
- (14) 軾『奏議集』卷三「再乞罷詳定役法狀」。
- (15) 閏二月癸卯（十五日）詳定役法所の「欲乞先次行下諸路、除衙前一役先用坊場河渡錢、依見今合用人數雇募、不足方許揭簿定差、其餘役人、除召募外、並依二月六日指揮定差云云（傍點引用者）」という建議が、裁可されている（『長編』卷三六九／三）。
- (16) (1) 別稿参照。
- (17) 『長編』は閏二月甲辰に光庭該奏を繋けるが、『紀事本末』「逐小人上」同月同日條は、まず該奏冒頭部分「臣竊以姦臣在位、（中略）。臣職在諫列、睹此姦臣未去、言不得不盡、（中略）。伏望陛下檢會臣前後累奏、早賜審斷施行」を採り、「今日廟堂之上云云」が有る該奏「貼黃」は採らない。従つて乾學等が據つたのは少なくとも、『紀事本末』「逐小人上」ではない（『長編』卷三六九／一〇—一一）。
- (18) ただし李燾注所引の軾「墓誌銘」は、「公亦與其選、獨以實告、而君實始不悅矣」とあるべきところを、「公亦與其選、獨以病在告、而君實不悅（傍點引用者）」に作る。中華書局標點本「校勘記」もこれを訂正していない。
- (19) 傅堯俞の詳定役法兼領は閏二月丙午（十九日）である。呂大防（吏部尚書）の執政官（尚書右丞）陞進に伴う人事であろう（『長編』卷三六九／一七、同卷三六九／一一）。
- (20) 『長編』熙寧三年（一〇七〇）九月癸丑（二十六日）條に「作東西府以居執政官」とあり、同四年九月丁未（二十六日）條に、「先是詔建東西二府各四位、東府第一位凡一百五十六間、餘各一百五十三間、東府、命宰臣・參知政事居之、西府、命樞密使・副使居之。府成、上以是日臨幸」とある（同卷二一五／一六、同卷二二六／一四）。
- (21) 「三省・樞密院言、同差除及進呈文字、理須會議者、先於都堂聚議、或遇假及已歸東西府、聽便門往來聚議。從之」がそれである（『長編』卷三五八／一七）。
- (22) 「墓誌銘」は惇の「諱侮」を、光の門下侍郎在任中とする。光が門下侍郎であれば、惇が光を「諱侮」し得たのは、光の謁告——および正月二十二日「劄子」上奏——以前に、ほぼその時は限定される。如何なる案件をめぐる「諱侮」であったかも、「墓誌銘」に言及は無い。應旂は「墓誌銘」の「門下侍郎」を「僕射」に改竄する。「諱侮」は閏二月庚寅の僕射發令以後のこととされ、これを簾前での光との役法論争と連書すれば、「諱侮」の対象は光の役法——ないしはその「劄子」——には限定される。惇の知樞密院事解任の原因として、簾前での役法をめぐる光への暴言（「諱侮」が、かくて虚構された。乾學等は「諱侮」に暴言「它日安能奉陪喫劍」を、加えた。「墓誌銘」における「諱侮」と應旂の改竄については（1）別稿参照。
- (23) 『長編』二月丁亥惇駁奏の一節に、「然初朝廷自議行免役之時、（中略）、當時所遣使者、不能體先帝愛民之志、成就法意之良、（中略）、法行之後、差役之舊害雖已盡去、而免役之新害隨而復生、（中略）、今日正是更張修完之時、理當詳審云云」とある（同卷三六七／九—一〇）。
- (24) 李燾は惇「劄子」を「檢詳追附」し得た場合、「同列」との論争に改めはしても、依然伯溫「聞見錄」の舊に仍り會話體を遺す現行『長編』正文を、「劄子」の引用に改める意圖であったか。
- (25) 文彦博の平章軍國重事就任については、（1）別稿参照。
- (26) 『長編』當該條では「十一月」。中華書局標點本「校勘記」に據り補正。

(27) 『聞見録』卷一一に「蔡京者、知開封府、用五日限、盡改畿縣雇役之法爲差役、至政事堂白溫公云云〔傍點引用者〕」とある。傍點部分は主に敦逸上奏と折衷したのである。

(28) 轍にはそのほかに、「臣前四上章言、蔡京知開封府、推行役法、明知舊法人數冗長、近隆聖旨許州縣相度有無妨礙、至於揭簿定差亦無日限、而京違此指揮、差人監勒開・祥兩縣、一依舊發人數、於數日內差撥了當、意欲擾民以沮成法云云〔傍點引用者〕」の上奏が有る〔長編〕卷三七七／一八。

(29) 『司馬公集』卷六三「三省咨目」に「光見欲作一文字奏聞、若降至三省、望諸公同心協力與贊成云云」とある。(1) 別稿参照。

(30) 『章氏遺書』卷九「爲畢制軍與錢辛楣宮詹論續鑑書」に、「徐昆山書最爲晚出、中略、宜若可以爲定本矣、顧永樂大典、藏於中秘、有宋東都則丹陵李氏『長編』足本未出、南渡則井研李氏『繫年要錄』未出、中略、今茲幸值石文盛治、四庫搜羅、中略、今宋事據丹陵・井研二李氏書而推廣之云云〔傍點引用者〕」とある。(1) 別稿参照。

(31) 参照。

(32) 軾撰光「行狀」は、光が「西府」で没したとする。「數月復病、以九月丙辰薨于西府、享年六十八」がそれである。清顧棟高『司馬太師溫國文正公年譜』卷八「九月丙辰朔、公薨于西府」も、あるいはこれに據ったであろう。ただ元豐八年六月丙戌(二十三日)詔は、「三省・樞密院官、如遇選〔遷〕拜、東西府居、更不遷移」という。「更不遷移」とは例えば、執政官門下侍郎から首相左僕射兼門下侍郎に陞進した場合も、東府某位から他の三位、あるいは西府四位のいずれかに、轉居せしめぬ意である。蔡京は、光正月「筓子」行下後、閏二月庚戌(二十二日)知開封府解任以前、少なくとも三度東府に光を訪れている。京の訪問のすべてが、光が首相を發令された閏二月庚寅(二日)以前であつたとしても、光は前年詔により轉居し得なかつた。ましてこの間光は、謁告療養中の身である。前年の門下侍郎就任以後、その死に至るまで一貫して光は、東府に居住したのである。東西府については(20)參照〔長編〕卷三五七／一六、同卷三六九／一七。

(33) 『北宋史概論』(『世界文化史大系』二二、誠文堂新光社、一九三五、『宮崎市定全集』一〇、巖波書店、一九九二、『中國史』巖波全書、一九七七、『宮崎市定全集』一、巖波書店、一九九三)。

「司馬光傳承」拾遺 ——再論明清編年書所述司馬光事蹟——

熊 本 崇

本文比較並探討了在明代清代的六種編年體史書中如何表述司馬光最晚年的事蹟，即於北宋哲宗朝初期（1085年～86年）的事蹟。

六種編年體史書分別是：A 明陳桎《通鑑續編》，B 明商輅《通鑑綱目續編》，C 明薛應旂《宋元資治通鑑》，D 明王宗沐《宋元資治通鑑》，E 清徐乾學等《資治通鑑後編》，F 清畢沅《續資治通鑑》。

其中F成書於《四庫全書》編撰之後。因此在對宋史的編纂中，與其它五者相比，具有格外豐富的史料環境，譬如說可以利用到宋李燾《續資治通鑑長編》的神宗紀，哲宗紀。

通過對六種史書的比較探討，比如可以明確以下諸點。

- 1 六者整體來說都受到了正史《宋史》的強烈影響。
- 2 六者間的比較中，後著的史書也受到了前著史書的強烈影響。例如C，D是以B為藍本，又能看到C也對E有一定的影響，而F幾乎只不過就是E的轉抄。
- 3 司馬光在這段時期中最重要的事蹟就是役法改革（回歸差役法），但總體說對其關注比較不足。依然沒有補正先行史書的謬誤，具有明顯的擱置問題，繼承問題的傾向。
- 4 由於司馬光所提出的役法（差役法）的不完備引起了元祐年間的巨大混亂，而六種史書對這一點都沒有傾注關心，不如說是對司馬光進行逐步的神格化。
- 5 編著F時，雖然具有通過利用《續資治通鑑長編》來補正先行史書E的不完備，進一步慎密考證的條件，但是在F中並沒有看到做出上述努力的痕跡。